シンビオートに寄生されたけど、意外とへいきだった

たるたるそーす

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

特殊なシンビオートに寄生された一般人の物語

目次

日常 1
出会い 11
出会い② 22
原点 34
帰国 48
発端 58
悲劇 74
幕引き 85
実り 104
INFINITY WAR 116
開戦
来訪者 125
来訪者② 139
来訪者③ 151
合流 169
戦闘 184

日常

『おい、ワタル。起きろ、朝だぞ』

頭の中でノイズの混じったような低い声が響く。俺は眠い目を擦って起きる。

「おはよう、ブラスト」

俺の体内に住んでいる”お友達”が話しかけてきた。

こいつはシンビオートと呼ばれる、地球外の寄生生物だ。名前はブラスト。

ひょんな事から俺に寄生することになって、たまに喧嘩しながらも仲良く共生している。

『ああ、起きたか。早く支度しろよ。今日はセールなんだからな。お前が好きなチョコレートが安く買えるんだぜ?』

「確かにチョコレートは好きだけど、ブラストのためでもあるんだからな?チョコレートがないと生きていけないんだから。」

『正確にはチョコに含まれるフェネチルアミンだがな。お前がアドレナリンをドバドバ出すのが嫌だって言うから、我慢してやってるんだ。感謝しろ。』

シンビオートは宿主のアドレナリンを餌にする。これを通常は闘争や逃避時の血流から摂取しており、アドレナリンは人間の脳に存在する神経伝達物質・フェネルチルアミンという化学物質からも安定供給されている。これはシンビオートが宿主の脳に深く食い込む理由だとされているが、この化学物質フェネチルアミンはチョコレートからも抽出することができる。まぁ、こいつは特殊で、他の方法でも生きる事ができる。

「はいはい、ありがとうありがとう。でもアレでも生きていけるんだろ?」

『アレでもいいが、毎日チョコとアレじゃ飽きてくる。』

支度をしてからバイクを走らせ、目的のスーパーについた。駐車場では、すでにたくさんの車が止まっていた。端っこのスペースにバイクをとめ、店内に入ると、多くの客がいた。どうやらこの時間が一番混むらしい。

『さっさと行くぞ!』

「おい!走らせるなって!」

急かすように、身体を操り、俺を無理矢理引っ張って進んでいく。そして、野菜コーナーに着いた。そこには、キャベツやニンジン、玉ねぎなどが山積みになっていた。

『どれにするんだ?』

俺はカートを押しながら、商品を見ていく。

「そうだなぁ・・・」

『早く決めろよ』
「わかっているって・・・」
　側から見たら1人で喋っているヤバい奴だが、一応、口に出さずとも話す事はできる。しかし、結構集中してないと出来ず、余程切羽詰まった状況じゃないと疲れてしまう。なので人の多いところでは携帯を耳に当てながらカモフラージュしている。そのまま会話を続け、買い物をする。
『だいぶ買ったな。』
「ああ、久々の買い出しだったしね。さあ、次の店行こうか」
『次の店はタイムセールだ。少し急ぐぞ』
「分かったよ、じゃあ近道しなきゃな。」
　そういって人通りの少ない閑静な道にバイクを走らせ店に向かっていると、路地裏で女性が大柄な男3人に車に無理矢理押し込められ、そのままスピードをあげていった。
『おい、見たな?』
「はぁ…ああ、見たよ。こんな事になるなら近道しなきゃ良かったな…おっと、それはあの女性に悪いか。」
『まあ、いいじゃねえか。久々に楽しめそうだ』
　バイクのスピードを上げ、車を追っていく。一定の距離を保ちながら尾行していく

と、車は廃工場についた。バレないようにバイクを少し離れた場所にとめる。中に入ると先程の女性が2人の男に囲まれていた。
「いやっ!やめて!」
「へへっ、いいじゃねぇか。その反応そそるなぁ!」
「おい、やめとけ。その女を傷物にしたらボスが怒るぞ。」
「なんだよ、ちょっとくらいいいじゃねぇか。生きてりゃこいつの親父から金は貰えんだ。楽しもうぜぇ?」
　男は女性の服を脱がそうとしていた。
「おい、俺とも楽しもうぜ」
　声をかけると、男の1人が振り向いた。
「ああ?なんだガキ。俺らは今忙しいんだよ。どっかいけや。さもないと痛い目にあうぞ?」
　そう言って、銃を突きつけてきた。しかし、俺達は怯まなかった。
「その女性から手を離せ」
　すると、男達は大笑いした。
「ぎゃははは!こいつ頭おかしいんじゃねえのか!?この状況わかってんのかなぁ〜?」
　それを一切気にせず、女性に語りかける。

「大丈夫ですか？怪我はありませんね。良かったです。それじゃあ、目をつぶってそこを動かないでください。絶対に、ね？」

女性は言われた通りに目をギュッと瞑る。それを確認した後、

「ほら、ブラスト出番だぞ」

と呟くと、粘り気のある赤いなにかが身体にまとわりついていき、大柄な筋骨隆々の男性のようなシルエットになる。

表面は紅く金属のように照り輝いており、頭部には目のような白い部分が５つ、金剛夜叉明王のように並んでいる。口は大きく開かれ、鋭い牙がいくつも並んでいる。それを見た男たちは

「な、なんだよコイツ!?化け物じゃねぇか!?」

「くそっ！いいから撃てよ！」

何発も弾丸が発射されるが、シンビオートは弾力ある変形自在の形質のため、全て体を通り抜けたり、衝撃を吸収し、銃弾が俺に届く前に止める。

『おい、それで終わりか？久々の出番なんだ、もっと楽しませてくれよ？』

「ひっ、ひぃっ、なんで銃が効かねえんだよぉ!!!」

『はぁ、本当にそれだけか？じゃあ次は俺の番だ。』

ブラストは心底残念そうに、無造作に腕を振り、男を吹き飛ばす。そのまま壁に突き

刺さり、動かなくなる。
（おい、大丈夫なんだろうな？死んでないよな？）
『ああ、大丈夫だ。俺は手加減が上手いんだ。命は奪ってねぇ…重要な骨が逝ったかもしれねぇが』
（おい！マジで頼むぞ！）
『ははは！冗談だ！』
　ブラストに改めて手加減するように頼んでいると、
「何1人でしゃべってんだ！この化け物野ろ『ほい、いっちょ上がり～』
　また1人壁に突き刺さった。
『んじゃ、もう変わるか？』
　とブラストが聞いてくるが
（いや、まだ1人いたはず、それにあいつらに仲間がいないとも限らないし…）
　そう言いかけた時、業火が俺たちを襲った。
　シンビオートは宿主に超人的な腕力や身体能力を与え、体組織をツルのように伸ばし攻撃に使ったり盾を形成する。　また、シンビオートは形状変化の能力の応用により、宿主の望む服装に変化するもできる。だが、そんなシンビオートにも弱点がある。
　その1つは”炎”だ。有機生命体に好んで融合するため、火に弱いのは当然かもしれ

ないが。

「は、ははは、や、やったぞ！化け物め！証拠を消すために持っていたものだったがこんなとこで役に立つとはな！」

男は火炎放射器を持っており、放火する機会を部屋の外から伺っていたようだった。

「こんな事になるとは思わなかったが、女が生きてるならかまわん！ほら、こっちへ来い！」

女性を無理矢理立たせ、連れて行こうとした時だった。

さっき炎が弱点と言ったが、それはあくまで普通のシンビオートだ。普通のシンビオートなんているのかって感じだが、ブラストはさらに普通じゃない。

『あぁぁぁ～この炎マジぃなぁ～。家のコンロの火の方がまだ美味いぞ…。』

身体が燃えがっているが気にせずブラストは男に近づく。

「な、なんで生きてる!?燃やしたはずだぞ!?」

『ん？あぁ～、俺は熱を吸収して養分にできんだ。他の奴なら今ので死んだかもしれんが、残念だったなぁ？』

そう。ブラストは炎を取り込み、自分の糧とする事ができる。それがこいつの特殊なポイントだ。もちろん、吸収した炎を放出することも。

『今の炎不味かったからな、ちょっと返すわ』

と告げ、自身の体細胞を男の方に飛ばし、触手を生やして女性をこちらに寄せる。体細胞が男の前に飛んでいったと同時にそれは爆発を起こした。ブラストは吸収した熱を爆破という形で出すことも可能だ。

「ぎゃあああぁぁ!!!」

男は突然目の前で爆破が起こり、断末魔の叫び声を上げる。

(おい!大丈夫なのか!アレ!)

『ああ、大丈夫だ。火力は抑えてある、せいぜい気絶するくらいに、な。少しハゲるくらいだろ。命は奪わない、それがワタルとのルールだもんな。』

俺がブラストに寄生され、能力の凶暴さに気付いたため、俺はこいつとの間にルールを作った。そのルールの内の1つは人を殺さない、というものだった。一度でも人を殺してしまうと、殺すという選択肢が生活に紛れ込んでしまう、とは誰の言葉だったか…。とにかく俺は力に身を任せることなく、人を殺さない事を誓った。元々ブラストが俺に協力的だったのもあり、すんなりと決まった。

だが、その代わり、事件を見かけたらすぐに首を突っ込む、というルールを設けてきた。その時は快く了承したが、こういう事になるといつも後悔している。そんな事を思っていると、女性と目が合った。女性は俺達に恐怖しているようだった。

(しまった…、だから目をつぶってるように言ったのに…)

『まあ、しょうがねぇさ。行くぞ』
　そのまま帰ろうとすると、
「あの！ありがとうございました！」
　恐怖で体が震えていたが、しっかりとこちらを見つめお礼を言ってきた。
『1人で帰れるか？』
「だ、大丈夫です！お父さんに電話するので！でも本当にありがとうございました！」
『ああ、今度は金持ちの親父さんとやらに護衛をつけてもらいな。じゃあな』
　一応周りを警戒し、問題ないようだったのでその場を去った。
　廃工場をでて、バイクを走らせながら
「はぁ、タイムセールもう間に合わねえよなぁ…？」
『ああ、丁度今終わった。』
「はぁ？マジかぁ…まぁ、しゃあないか…」
『でも善良な一般市民を救ったんだ、誇れる事だぞ！』
「だけどなぁ、あの女性、アイツに似てたんだよ。ああ、くそっ思い出しちまうっ」
『ああ、ワタルのオサナナナジミか！』
「幼馴染な、そんなどっかの虫みたいな言い方すんな」
　くだらない会話をしながら自宅へ帰り、テレビをつけると、ビルが爆発する映像や、街

が宙に浮いている映像などが映し出されていた。
『ワオ、こりゃすげぇな！エイリアンみたいな奴も出てきたぞ！』
「お前も似たようなもんだろ、しっかし、ソコヴィア協定ねぇ？こんなもんに意味があるのかぁ？」
『まあ、いいんじゃないか？俺達には関係ないだろ。それよりデカい仕事が入ってきたんだろ？俺も手伝うからすぐ終わらせるぞ。』
「ああ、それもそうだな」
　この時の俺達はまだ、これから激動の渦にのみ込まれることを知らなかった。

出会い

女性が連れ去られる事件が起きた数日前。自宅でチョコを咥えながら、首から生えてきているブラストにライターの火を食べさせていると、携帯電話が鳴った。画面を見た後、そっと机の上に置き直した。

『おい、出なくていいのか?』

「これは出なくていい電話だ」

『そうなのか?まぁ、そんなことよりこの火は美味いな!このライターどこのだ?高級品だろ!』

「コンビニ」

また着信音が鳴り響く。

「チッ……もしもし、何だよナナセ。俺は忙しいんだけど?」

『ちょっと!あんた今舌打ちしなかった!?私と話すの嫌ってわけじゃないでしょうね!!』

先程から電話をかけていたのは、腐れ縁の幼馴染の星河七星だった。ナナセは実業家の父をもつ、お金持ちのご令嬢だ。彼女が通っている大学も、その父の会社が建築に携

わっているそうだ。清廉潔白、不正や曲がった事が嫌いな性格で、俺とは大違いだ。
『まったく、もう…最近連絡ないから心配してたんだから…』
「はいはい、ありがとさん。んで、どうしたんだよ。何か用事でもあったのか？」
『ああ、そうそう。実はね、アンタにまた仕事を頼みたいのよ。』
「おい、そんなことしていいのか？最近仕事もらいっぱなしだぞ？俺なんかに頼んでいいのか？」
『いいの！パパだって、ワタルは仕事も丁寧で求めていた以上の事をしてくれるって言ってたんだから！それに、私が仕事を斡旋しないとアンタお金なくなって、飢えちゃうんじゃないかって心配で……デザイナーの仕事、私からもらった仕事以外である？』
「あ、あるさ…2件くらい…」
　電話口からため息が聞こえた。俺はデザイナーの仕事をしているが、ほぼナナセの父親の会社の仕事を引き受けて生活している。そのため彼女の父親には本当に頭が上がらない。
「分かったよ…。でも、わざわざナナセが説明してくれなくとも、ナナセの親父さんの会社の人に任せちゃえばいいんじゃないか？ナナセだって大学もあるし、歌の練習もするんだろ？」
　ナナセは歌手になりたいらしく、普段から歌の練習をしたり、ネットに歌を投稿した

りしており、ちょっとした有名人になっている。俺はそんなナナセに気を遣ってそう言ったが、

『なに？私じゃ嫌なの？』

と電話越しでも伝わるくらい凄まじい剣幕で圧をかけてきたので、

「いえ、ナナセさんが良いです」

『よろしい♪』

と言ってしまった。相変わらず怖い女である。

「んで、どんな仕事なんだ？」

『うん。ニューヨークにあるミッドタウン科学技術高校に行ってほしいんだ。ワタルは今サンフランシスコにいるんだよね？もちろん移動費は払うからさ。』

「移動費は助かるが…ニューヨーク？なんでまたそんなとこに？しかも高校？」

『うん、実はそのミッドタウン高校、パパの会社が建設に関わってたみたいでね？そこで今度、色々な職業な人を集めて生徒向けの就職説明会みたいものやるみたいなの。そこにパパの会社の人と一緒に、ワタルにも出てほしいんだって。』

「んん？そんなん俺が出ても何もできないぞ？」

『それがね、年齢が近い人の意見もあった方が学生達にも響きやすいだろうって』

「そうか、そこで俺は？」

『ワタルはただ普通に話したり、質疑応答とかしてくれれば大丈夫だと思う。』
「そうか、まぁそれなら何とかなるかな。んじゃ、いつ行けば良いんだ？」
『2週間後くらいかな』
「了解。じゃあ詳しいことはメールでやり取りしよう。仕事ありがとうな、親父さんにもよろしく言っておいてくれ」
　そう言いながら電話を切ろうとすると、
『待って…、本当に日本に戻ってくる気はないの？私と一緒の大学、今からでも一緒に通おう？』
「…悪いな、これ以上迷惑はかけられないし、案外この仕事気に入ってるんだ」
『そっか…、ワタルが決めたことだもんね。』
「ああ。」
『ねぇ、最後に一つだけ聞いていい？』
「なんだ？」
『ワタルの夢は何？』
「夢？俺の？」
『そう。ワタルには目標がないように見えるの。だから、もし何かあったらいつでも相談して？私はワタルの力になるから！』

「ナナセ……」

「お前は本当に優しい奴だな」と言おうと思ったが、それはやめた。彼女はお金持ちのお嬢様だが、性格は曲がっていないし、何より凄く優しくて、いつも人の事ばかり考えている。だからこそ、彼女の負担になりたくない。それに、彼女の優しさに甘えてしまったら、俺は本当にどうしようもなくなってしまう。

「いや、何でもない。とりあえず仕事頑張るわ。色々ありがとな。」

そう言って電話を切る。

ナナセとは小さい頃からよく遊んでいた。昔からお節介焼きで、俺のことを気にかけている。ナナセは本当に優しい女の子だ。だけど、そのせいで彼女まで不幸になってほしくないし、その事で彼女に迷惑をかけるわけにはいかない。

だから、俺はあの事件の後、進学を断念して日本を離れ、デザイナーとなった。そして今はアメリカで奇妙な相棒と生活している。こんな人生も悪くないだろう、と黄昏ていると、電話の間ずっとライターの火を食べて、静かにしていたブラストが

『また例のオサナナジミか?』

「幼馴染な…ああ、本当、良い奴だよ」

『そうか、なら早く付き合え』

「はぁ!?」

　ブラストがとんでもない事をいいだすので、思わず大声をあげてしまった。
『ナナセはワタルに惚れている。そしてワタルもナナセに惚れている。ラブラブカップルの完成だ』
　ブラストは5つの目を細め、ニヤニヤと笑ってくる。
「ちげぇよ！ナナセには俺みたいな奴じゃなくてもっと良い奴がいるだろうし…ってか俺もアイツのことそういう目で見てねぇし！」
『はぁ、そんなんだからまだ童貞なんだぞ』
「うるせぇ!!」
　ブラストは時々こういう下世話なことを言い出す。全く困った相棒である。
『まあ、とりあえず、ナナセのためにも仕事をこなすぞ』
「へいへーい、分かったよ。とりあえずメールで詳細聞くか……」
　そのまま準備が着々と進み、ついにミッドタウン科学技術高校に行く日となった。現在はもうニューヨークに着いており、ナナセの親父さんの会社の人と合流し、軽い打ち合わせを行っていた。そのままミッドタウン高校へと行くと、様々な人種の生徒が在籍しており、これなら日本人の俺もさほど目立たないだろうと、内心ほっとした。
「それではワタルさん、本日はお願いしますね。」
「はい、若輩者ではありますが誠心誠意努めさせていただきます。」

『お前本当にワタルか？なんだその丁寧な口調は？』

この学校の理事長らしき人に挨拶をしていると、ブラストが茶々を入れてきたので小声でうるせぇ、と言い、舞台袖へと向かう。するとそこには先程まで一緒にいた人達がいて、軽く話した後、それぞれの持ち場につく。いよいよ説明会が始まり俺の番が回ってきたが、段取り良く進める事ができ、質問にもスムーズに答える事ができた。生徒達の反応も悪くなさそうで安心した。

その後は、ぜひうちの生徒の学校生活を見ていってほしい、と先生方に言われ見学する事にした。校舎を歩いていると、自分が通っていたわけでもなく、ましてや外国の学校だというのに、不思議と懐かしい気持ちになった。しばらく佇んでいると、

「あの、大丈夫ですか？もしかして迷子？」

「ああ…いや、少しな、大丈夫。ちょっと考え事してただけさ。」

声をかけてきたのは、ふくよかな体型をした、スターウォーズの服を着ているアジア系の生徒で、隣には顔立ちの整った少し大人しそうな少年が立っていた。

「本当に大丈夫ですか？校門まで送っていきましょうか？」

「君たちはそんなに俺のことを迷子にしたいのか？俺は迷子じゃない、大丈夫だ。それより授業はいいのか？」

と俺が聞くと、２人はきょとんとしており、

「もう授業は終わりましたよ?」
「これから部活なんです」
　俺はかなりの時間をここで過ごしていたようだった。心の中で、なんで誰も声かけてくれなかったんだよ、とボヤいていると、
『話しかけたらいけない雰囲気が出てたからな、だから俺も話しかけなかった』
　なんだよ、それ、と思うと同時に、ついにブラストと俺が念話できるようになったのか!?と驚いていると、
『ちなみに俺はお前が何を言ってるか分かってないぞ、ただなんとなく表情から察した。』
　そう言われ、がっかりしていると
「あの?どうかしたんですか?驚いたり、落ち込んだりしたりしてますけど…」
「い、いや、なんでもない。それより、そんな時間なら早くいかないと部活が始まるんじゃないのか?」
「そうだった!えと、今日はありがとうございました!説明会、すごく分かりやすかったし、すごくタメになった気がします!」
　と大人しそうな少年が言い、走っていく。もう1人の少年も
「俺もすごく良かったと思います!ありがとうございました!…おい、待てよピーター

！」

と言って走り去っていった。

『元気で良い奴らだ』

「そうだな、良い子達だ。」

２人の少年から心地よい感想を貰い、高校を後にする。お土産などを買い、帰ろうとしていると、どこからか悲鳴が聞こえた。

『いくぞ！』

「ああ！」

悲鳴の聞こえた方に向かうと、男が女性のカバンを無理矢理奪い、逃走しようとしていた。俺はすぐに追いかけようとしたが、その男の背中に糸のようなものがくっ付き、

「よっと…ダメでしょ？人のものを盗るのは犯罪だよ？そこで警察が来るまで待ってて」

そう言いながら、赤と青の全身タイツのような奴が男を近くのポールにくくりつける。

「いっちょ上がり！お姉さん！ほらカバン！」

そう言って女性にカバンを渡し、こちらを向いて

「お兄さん、勇気あるね！今回は僕がいいとこ取りしちゃったけど、きっとその勇気は今

後も輝くよ!じゃあね!」
　そう言って、どこかブラストと似たようなデザインの顔をしていたタイツ男は糸を使ってどこかへ行ってしまった。
「なんだったんだ…?なんか褒められたが…」
『遊べなかったのは残念だが、面白い奴だったな、あのタイツマン』
「ニューヨークにはあんな奴もいるのか…世界は広いな」
　男も拘束され、女性も警察へ連絡しているようだったので、そのままサンフランシスコへ帰った。自宅までの道中、メールでナナセに仕事が完了したこと旨を伝えていると、
『おい、家の前に誰かいるぞ』
　ブラストにそう言われ、顔を上げてみてみると、アパートの前にフードをした男が立っており、なにやらブツブツと独り言を言っていた。
「おい、やっぱりやめた方がいいんじゃないか?ここにいる奴はクレタスよりヤバいんだろ?それにここにいると、いつ警察が来るか分かったもんじゃない。」
「いや、確かにお前は良い相棒だよ、ああ、そうさ、でも上手くいくとは限らないだろ?……あん時は完璧だっただろうって?あれはアイツらが共生してなかったから…」
「なんだよ、あれ。怖すぎるだろ、なんで1人で喋ってんだ?」

『あー、そういうのブーメランって言うんじゃないか？』

永遠と独り言を続ける男を見て、少し時間を空けてから帰ろうと思い、近くの喫茶店に行こうとしていると、男がこちらに気づき、

「あぁー君、ここの住人か？ちょっと話がしたいんだ！……最初は俺のプランで行く、いいな？お前のは最終手段だ」

最後の方はよく聞こえなかったが、無視をして喫茶店に向かおうとすると、

「お？喫茶店に行くのか？よし、俺が奢ってやる。だから少し話をしないか？な？」

「あぁ～、人の金でする飲食は確かに最高だけど、今はそんな気分じゃないんだ。遠慮しとくよ。」

「そう言うなよ、おっと紹介が遅れたな、エディ・ブロックだ。記者をやってる。よろしくな。」

無理矢理右手を取られ、握手させられる。そのまま喫茶店に連れ込まれた。心底面倒なことになりそうだった。

出会い②

こういうタイプの人間は、しつこいのだ。しかし、今更断るのもそれはそれで面倒になりそうだ。そのまま喫茶店に入り、人目につきにくいテーブル席に座り、コーヒーを注文する。それから目の前の男に話を聞く。

「俺は今宮　亘。ワタルでいいよ。それでブロックさん、ご用件は？」

「俺もエディでいい。2年前、何があったかを聞かせてくれないか？」

なんとなくその話だと思っていた。

この手の人間に話すと当然だが、どんなことでも必ずと言って良いほど記事にされ、それが世界中に広まるだろう。色々面倒な事になるし、俺も話したくなかったので、適当な理由をつけて断ろうとすると、

「ああ、心配しなくともワタルが嫌だと言った部分はできるだけ記事にはしないから、安心してくれ。もちろん、俺が記事にすべきと思ったことはするがな。この前は言われた事以外を記事にして大変な目にあったんだ。」

そう言って遠い目をしていた。俺はあまり新聞などを読んでいなかったので、なんの事か分からなかった。でも、なぜかこの人に親近感が湧き、少し信じてみようと思った。

もちろん嘘の可能性もあるのだが。
「わかったよ」
「それや良かった。さっそく聞きたいんだが、ここに見覚えはないか？」
そう言って差し出してきた写真には研究所が写っていた。それを見ると、嫌な記憶が蘇り、思わず顔を顰めてしまう。そこは俺があの事件に巻き込まれ、ブラストと共に生きる事になったきっかけの場所だった。
「おい、大丈夫か？でもそんな顔をするってことはこの研究所を知ってるんだな」
「ああ…俺はここに行った事がある」
「じゃあ、この研究所がどんなところか知ってるか？2年前何があって消滅したんだ？」
「…どうだろうな」
「じゃあ、何でここに行った？」
「それは…親父が勤めてたから…」
「父親が？」
俺は小さく頷く。あの時の光景がフラッシュバックしたが、恐怖で震える手を抑え、拳を強く握った。
『ワタル、大丈夫か？』
「本当に大丈夫か？」

ブラストとエディさんにそう言われ、大丈夫だと答える。
「よし、じゃあ続けるぞ?」
そう言ってエディさんは
「俺も似たような研究所に行ってな、そこでは…そうだな、まぁ、宇宙から来た危険な生物?の研究をしてたんだ。なんだかんだあって今は立ち入り禁止になってるがな。」
そのまま続けて、
「そこのデータを盗…ちょっと見てみたんだが、その危険生物がこの写真の研究所にもいたらしいんだ。それに、ここでは俺が行った研究所よりも先にソイツらを研究してたらしい。だが、ある日本人が立ち入ってから、研究所は消滅し、封鎖。危険生物も行方不明。」
そこで区切り、こちらを見る。
「ここ最近、この町では犯罪者がいつのまにか捕まっていたり、犯行現場で気絶していたりするらしいな?」
「その話と今までの話、なんの関係が?」
俺は内心ドキッとしながらも、質問する。
「その生物はな、寄生して生きていくんだ、人とか動物とかにな。そして、寄生された奴は暴れたい衝動に駆られる。そして、段々と暴力に支配されていく」

『ワタル、どうする？コイツをぶん殴るか？それとも逃げるか？』
　ブラストがそう言うも、身体がこわばって動かない。心臓がドクドクと身体中に鳴り響く。
「ワタル、君にもいるんじゃないか？危ないお友達が、身体の中に、な？」
『ちっ！』
　そう言ってブラストは俺の身体を無理やり動かし、その場から逃げようとするが、黒い何かが俺の身体にまとわりつき、座らせられる。
「おい、乱暴だぞ！」
『大丈夫だ、それに今ので証明したようなものだろう』
　地を這うようなドス黒い声が聞こえたかと思うと、なんと、エディさんの首からブラストと似た黒く、凶暴な顔をした生物がでてきた。
『よぉ、ほら、出てこいよ、俺たちにビビってんのか？』
　黒い生物…多分シンビオートであろうそれが俺に、いや、俺の中のブラストに語りかける。ブラストも同じように顔を出し、
『ほぉ、まだ俺以外にも地球に来ていた奴がいたとはなぁ』
「おい、ヴェノム、本当に大丈夫なんだろうな？コイツ目が５つもあるぞ!?」
『エディ、別に目の数で強さは決まらない。コイツがヤバいのは確かだがな』

そう言ってしばらく睨み合っていたが、俺は気になっていた事を聞く。
「なんでエディさんもシンビオートを？」
「ああ、さっき話した研究所で寄生されてな。そこからはコイツに気に入られて成り行きで一緒にいる。それよりそっちはどうやってソイツと？」
『ソイツじゃないブラストだ。そう呼べ』
「分かった、そんなに睨まないでくれ…じゃあどうやってブラストと会ったんだ？」
「ああ…ちょっとここじゃ話ずらいな。俺の家に来てもらっても？」
「ああ、分かった。ほら、お前も睨み合ってないで、行くぞ」
「ブラスト、お前もそんなに威圧するなよ」
『『コイツが先に睨んできたんだ、俺は悪くない』』
愉快な隣人達はそう言ってそれぞれの身体に戻った。約束通り奢ってもらい、喫茶店を出て、自宅にもどる。再びエディさんとテーブルを挟んで向かい合うように座る。
「それで？どうやってブラストと？」
『どうせ、つまらん話だろう』
「ヴェノム、黙ってろ」
「ははは…まぁ、確かに面白くはないだろうな。研究所の件とも関わってるから、少し長くなるけど？」

と聞くと、構わない、と言って頷いていたので、俺は2年前のことを話し始めた。

〜〜〜〜2年前　アメリカ　ロサンゼルス郊外〜〜〜〜

「親父のやつ、なんでわざわざ日本から俺を呼び出したんだよ〜！見せたいものがあるとか言ってたけど、全然教えてくれなかったし」

1人でボヤきながら、父の勤めている研究所に向かう。父は界隈では有名な生物学研究者だった。俺は小さい頃に母を交通事故で亡くし、父と2人で暮らしてきた。

しかし、俺が高校に入る頃、アメリカの研究所から父に声がかかり、とある研究に参加できる事となった。父は最初、俺のことを考え、辞退しようとしていたが、研究に参加したがっていたのを俺は知っていたので、一人暮らしを始め、父をアメリカへと見送った。そんな父から連絡が来て、研究を見せてくれることとなった。

「ここが、親父が働いている場所か……」

研究所の外観は白くて大きな建物だ。入口から中に入ると、受付があり、その奥に研究室などがある。廊下は広く、白い壁に囲まれており、天井はガラス張りになっている。

俺は受付を済ませ、エレベーターに乗って上の階に行く。

最上階のフロアに着くと、そこはガラス張りの部屋だった。中には白衣を着た研究員と思しき人たちがいた。その中からどこか頼りなさそうな、けれど優しい目をした男性

がこちらに駆けよってくる。親父だった。
「ワタルー元気だったか？」
「ああ、元気だよ。そっちも元気そうで良かったよ、親父」
　久しぶりの再会なので、しばらく話し込んでいると、
「そうだ！電話で言ったが、見せたいものがあるんだ！」
　そう言って研究室に連れて行かれる。そこには見たこともないアメーバのようなものが厳重なケースの中にいた。
「何だよ、これ？」
　と聞くと、
「これは、地球外生命体だ。」
　と、親父は答える。
「地球外生命体？どういうことなんだ!?」
　すると、
「実は、この生物は地球外から来たものなんだ。隕石にくっついて地球にやってきたようでね。」
　と説明する。
「つまり、宇宙人って事なのか……？」

と聞き返すと、
「まあそういうことだね。これを人と呼ぶのかは微妙なとこだけど」
と、説明を続ける。
「そして、コイツらはシンビオートというらしい。生物に寄生して、共生していく。寄生された生物は超人的な能力をもつようになるみたいだ。」
「へぇ、すごいな……でもなんで俺を呼んだんだ?」
「ワタルはデザイナーになりたいんだろ?こういったものを見てインスピレーションを受けられればなって」
「そんな理由で見せていいのかよ?世間に公表してないんだろ?コレ?」
「いいんだよ、僕はここじゃ結構偉い方だからね。少しくらい融通がきくさ。」
「おいおい…」
口ではそう言ったが、こういうのものを見れるのは確かにいい機会かもしれない。
「分かった。じゃあさ、今日は泊まってもいいかな。久しぶりに一緒に飯食おうぜ。しばらくこっちにいるからさ。」
というと、
「もちろんだ!元からそのつもりさ!お前の好きな料理作ろうじゃないか!」
と言ってくれた。

その後は久々の父の料理を楽しみ、懐かしい気持ちになりながら、家族の時間を過ごした。夜になり、俺は父の家の空き部屋で寝ることとなった。

ベッドの上で横になって、今日の出来事を振り返る。シンビオートか……。地球外生命体と言っていたがいったいなんなのだろうか。そんなことを考えているうちに眠りについた。

翌朝、目が覚めると、父はもう仕事に向かうようで、

「ワタル、悪いんだが、今日は実験が長引きそうで遅くなるかもしれない。先にご飯とか食べててくれ！」

そう言って急いで家を飛び出していった。特に予定もないので、そのまま家でダラダラと過ごしているうちに夜となった。

しかし、日が変わりそうな時刻にになっても父は帰って来なかった。

しょうがないのでそのまま寝る事にしたが、翌朝になっても父は帰ってこなかった。

おかしいと思い、父に電話をかけると、すぐに研究所の方にきてほしいと淡々と告げられ、少し不審に思ったが言われた通りにする。

研究所に入ると、先日訪れた時より静かな空気につつまれており、見渡す範囲に人が1人もいなかった。奥に進むと父の姿が見えた。だが、様子がおかしかった。こちらに気づくとゆっくりと近づいてきた。すると、父がいきなり襲いかかってきた。なんとか

避けることができたが、明らかに様子が変だった。まるで何かに取り憑かれたように攻撃してきたのだ。

「おい！親父?!どうしたんだよ?何があった!?」

必死に呼びかけるが返事がない。その後も何度も呼び掛けたが無駄に終わった。このままではまずいと思った俺は逃げることにした。

出口の方へ逃げようとしたが、父に立ち塞れ、仕方なく窓から出ようとした時、突然目の前に父が現れた。

そして、俺の腹部を殴った。

「グフッ！」

俺はそのまま吹き飛ばされ、壁を突き破ってどこかの研究室に倒れ込んだ。一瞬意識が飛びそうになるも、なんとか持ち堪えた。

「痛てぇ……クソッ」

俺の身体はもうボロボロだった。

「おい！大丈夫か!?」

誰かが声をかけてきた。どうやら研究員らしい。ここに隠れていたようだ。

「あぁ、何とかな……」

そう言って立ち上がろうとするが、うまく力が入らない……。足が震えて立っている

だけでやっとだった…。
「なんで親父が…」
　そう呟くと、研究員が
「もしかしてイマミヤの息子か!!…すまない…君の父親はシンビオートに乗っ取られてしまったようだ…」
「シンビオートに…?どういうことだ…?」
「私たちはシンビオートを動物に寄生させる実験をしていたんだが、うまく研究が進まず、それに辛抱ならなくなった所長が人間に寄生させる、なんて言い出したから、イマミヤが反発したんだ。それで所長と揉めて…そのまま無理矢理シンビオートに寄生されて、ああなってしまった…」
「嘘、だろ…?元に戻す方法はないのか…?」
「あのシンビオートは高熱と４０００から６０００Ｈｚの音に弱い…だからそこを突けばイマミヤを救えるかもしれん…」
　そんな事を話していると父がやってきて、研究員を床に向かって殴りつけた。そして俺にも拳を振りかぶっていた時、不意に動きが止まり、
「やめ…ろ…ワタルには手を出すな…」
「親父!」

「はやく…にげろ…！」

そう言って父は俺を突き飛ばした。すると父の身体からシンビオートが飛び出し、床に倒れていた研究員を触手のようなもので刺し殺してしまった。俺は急いでその場から逃げだしたが、その触手につかまれて放り投げられた。再び壁を突き破りながら研究室にたどり着く。背中の方でガラスが割れるような音がして、身体に何かが纏わりついてきたが、俺は意識を保つことができず、そのまま倒れてしまった。

原点

頭の中で声が響く。

『……ろ……い！……きろ…！』

誰かの怒鳴り声のようだ。

『…やく……お…ろ！……』

何を言っているんだ？

『おい、早く起きろ！』

今度ははっきりと聞こえた。

目を覚ますと、目の前には拳が迫ってきていた。

「!?」

反射的に顔を横に逸らして避ける。すると僕の頬を掠めて拳が床に突き刺さった。そして、すぐに起き上がり距離を取る。

俺が起き上がると同時に、その男は後ろへ飛び退いた。そうだ、俺は親父に襲われていたんだ。いや、親父に寄生したシンビオートに、か。

眠っていた脳をフル稼働し、どうするか考えていると、俺の頭の中の声が、俺を急か

すように話しかけてきた。
『早くこいつを倒せ！』
何を言っているんだ、そもそもこの声はなんなんだ。そんなことを考えていると、
『俺はお前だ。そして、お前は俺でもある。理解したか？ワタル？』
分かるわけないだろう、そんな抽象的な言葉では。…いや、こいつはなんと言った？
今俺の名前を呼んだのか？
『俺はお前なんだ。そのくらいの事は知ってる。脳を少し覗かせてもらったからな』
脳を覗く…？そもそもこの声はどこから聞こえているんだ？
『質問が多いな。っと、来るぞ！』
頭の中の声がそう言うと、再びシンビオートに寄生された親父が殴りかかってきていた。
「ちっ！」
俺は素早く拳を避ける。
すると、さっきまで俺がいた場所が粉々になっていた。
「くそ！なんなんだよ!!」
避けながら叫ぶ。
そして、親父の蹴りを避けた。

今度は壁に大きな穴が空いていた。
『おい！反撃しろ！』
そんな事ができたらとっくにしている。避けるので精一杯だ。
…おかしい、俺は親父の攻撃を避けられなかったはずだ。そんな事を思っていると、蹴りが飛んでくる。
『もういい！俺がやる！』
頭に声が響くと体が勝手に動き、親父の蹴りを避け、足から赤いアメーバのようなものが出たかと思えば、そのまま親父の腹部を蹴り返した。
「ぐっ……！」
親父が苦痛の表情を浮かべながら、吹き飛んでいく。
「な、なんだよ、これ…」
突然のことに驚いていると、
『お前に説明するためにも一旦ここから離れるぞ！』
そう言って、俺の身体を無理矢理動かして逃げていく。俺はそれに抗おうと必死になるが……
「くっそ！　なんなんだよ！」
抵抗虚しく、俺はそのままどこかに連れていかれる。

そして、人気のない場所まで来ると急に立ち止まった。
すると、頭痛が襲ってきた。頭が割れそうなくらい痛みが走る。
「ぐぅっ！」
思わず頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。脳に莫大な情報が流れ込んでくる。すると、またあの声が聞こえてきた。
『大丈夫か？少しだけお前に俺の情報を流し込んだんだが』
「ああ…大丈夫だ…正直吐きそうだが…」
どうやら頭の中の声は俺に寄生したシンビオートのものだったらしい、名をブラストと言うらしい。俺の身体から赤くうごめくものが伸び、顔のようなものを形成する。
「お前が喋っているのか？」
『そうだ』
俺は声の主が目の前のシンビオートだと理解し、質問をする。
「なんのために俺に寄生した」
するとシンビオートは答えた。
『お前の脳にあるアドレナリンを喰らう為だ。それにお前もだいぶ弱っていた。傷も治してやったんだぞ』
言われてみれば俺の身体はどこにも傷もなく、不調はなかった。

『俺とお前は相性が良い。俺たちは凶暴な怪物のように扱われているが本来は違う。俺らは魂の闘士だ。徳のある肉体と精神の宿主と共生すれば、究極で崇高な戦士になることができる』

　と、シンビオートが続けて

『お前は少し鍛えているようだが肉体は正直微妙だ。だが精神は素晴らしい素質がある。俺のパートナーになるに相応しい。』

「ふざけんな！俺は絶対に認めねぇ！」

『お前はシンビオートの力をどう思う？』

「人の命を奪う最悪な存在だ。俺の親父に寄生した奴みたいにな」

　俺は目の前のコイツを見据えて言った。

『それは違う。アイツは不完全なだけだ。お前の父親と同じようにな』

「何だと？俺の親父のどこが……」

『お前の父親はシンビオートに寄生された時、同時にヤバい薬物を投与されていたみたいでな。暴力的になっているようだった。おそらくシンビオートもそれに呼応しているんだ』

「それじゃあ、俺の親父は……」

『ああ、そうだ。お前の父親はもう助からないだろう。シンビオートをどうにかしたと

ころで、劇薬に体が耐えられないはずだ。今はシンビオートが薬物の反動を抑えているからな、シンビオートのおかげで生きているといってもいい。……お前に声をかけたとしても、それは最後の力を振り絞った結果だ』

寄生されてからも父に声をかけられた事を伝えようとするも、先にそう言われた。信じたくなかったが、シンビオートから流れ込んできた情報がその発言に裏付けしていく。

「じゃあ、どうすれば…」

『一つだけ方法がある』

「どんな方法だ?」

俺が期待しながらシンビオートに問いかけると、

『シンビオートを取り除いた後、俺がお前の親父の体に寄生する、そして薬物を抜く。簡単だろ?』

「お前を信用しろってのか?」

『おいおい、俺はお前の身体を治してやったんだぞ?それに俺はお前の事を気に入った。これからも寄生させてくれるなら父親を助けてやる』

どうだ?と問いかけてくる。親父を助けるため俺は渋々了承した。

「分かったよ……その代わり、ちゃんと助けろよ?」

『ああ、任せろ。これからよろしくな、ワタル』
「ああ、よろしく、ブラスト」
　その後俺は、いや、俺たちは研究所に戻り、親父を探した。すると、すぐに見つかった。まだ暴れていたようで、こちらを見るとすぐに襲ってきた。
『よし、やるぞ！』
　そう言って、俺の身体から脈々と赤いものが流れ出ていき、どんどん包まれていく。そして、怪物のような姿となり、こちらも攻撃を仕掛ける。
　こちらの攻撃は当たり、あちらの攻撃は当たらない。そんな状況で、いける、と思っていると、親父の体を黒に近い緑の、液体のようなものが包み込んでいき、俺たちと似たような姿となる。
『ほお、俺たちの真似事か！かかってきやがれ！』
　そして俺達に向かってくる。それを避けようとするが、避けきれずに吹っ飛ばされてしまう。壁に激突し、そのまま壁を突き抜けて研究所の外まで吹き飛んでしまう。
（大丈夫か!?）
　ブラストにそう声をかけるが、
『くそ、少しまずい事になった。アイツ、想像以上のパワーだ』
（あんな威勢のいいこと言ったのにどうするんだ？一旦引くか？）

『バカ言うな！逃げて勝てるのか？』
（じゃあ、どうするんだ！）
『いいから黙って見てろ！』
そう言って、シンビオートに飛び込んで行く。
するとブラストは、シンビオートを殴りつけると同時に拳部分を爆破させた。
「ウゥッ！」
シンビオートは堪らず、その場から大きく離れる。
（今のがお前の能力なのか）
先程流し込まれた情報を見てそういうと、
『ああ、熱を吸収してないから威力は落ちてるがな』
と答えた。
そのまま親父に寄生したシンビオートを爆破も交えながら殴り続ける。段々とシンビオートが剥がれていく。
（よし、いけるぞ！）
『ああ！もう少しだ！』
そして、親父の身体からシンビオートを引きずり出そうとした瞬間、シンビオートが小さな触手を伸ばし、近くの瓦礫を投げ、所内の警報装置を鳴らす。

ジリリリリリリリリリ‼?
『ぐあぁぁぁぁっ!!!』
「ウゥッ……!!」
耳をつんざくような警報音にシンビオート達は堪らず呻き声をもらす。ブラストはすぐさま体細胞を飛ばし、スピーカーを爆破して壊すも、その隙にシンビオートは逃げていく。
『こざかしい真似をしやがる!!』
(後を追うぞ!)
『分かってる!』
シンビオートの逃げる先には、武装した特殊部隊が待ち構えていた。彼らはこの研究所で問題が起きた際に対処する為、所長に雇われた傭兵達だった。
「動くな!」
シンビオートが警告を無視して突撃する。傭兵達は必死に弾丸の雨を浴びせるも、効果はない。傭兵達はシンビオートに次々と殺され、蹂躙されていく。
『お前の相手は俺たちだ!!』
そう言って再びシンビオートに殴りかかる。だが、今度は簡単に避けられてしまう。そして、強烈な蹴りが腹に入る。

『ぐっ……!』

あまりの強さに、思わず呻き声をあげる。吹き飛んだ俺たちにシンビオートは追撃してくる。咄嗟の判断で、両手から爆発を起こす。

「グギャァ!!」

『よし! 反撃開始だ!』

シンビオートが怯み、一気に畳み掛けるように攻撃する。拳はシンビオートにクリーンヒットし、さらに回し蹴りを入れる。

シンビオートは吹っ飛び、壁に叩きつけられる。

『どうだ!?』

シンビオートは壁から剥がれ落ちると、俺たちに向かって再び突進してきた。

「グァァ!」

俺はその攻撃を間一髪で避けて、カウンターで腹パンを食らわせる。するとシンビオートは口から粘液を吐き出しながら吹き飛ぶ。

「ギャァ!?」

『きったねぇなぁ!!』

吹き飛んだシンビオートを蹴りあげ、爆破しながらそう言うと、突然、研究所内に金属音のようなものが鳴り響く。

『くそ！またかよっ…！』
「グギャァッ…！」
　シンビオート達は再び呻き声を漏らし、互いの宿主の中へは入っていく。不快な音が鳴り続けており、頭を抑え苦しんでいると、親父が、
「ワ…タル…逃げろ…」
　親父、意識がまだあったのか。父がまだ正気を保っていた事に喜び、そう言おうとするも、父の言葉に遮られ、
「この音が鳴っているという事は…所長か…傭兵が…自爆スイッチを押したみたいだ…シンビオートもろとも研究所を消すつもりだろう……」
　父の言う通り、傭兵の連中はもう既にいない。そして、所内が揺れ始め、天井が徐々に崩れ始めていることに気付く。
　クソ、なんてこった！　あの傭兵ども、俺たちごと始末するつもりだったんだな!?
急いでここから脱出しないと、生き埋めになってしまう。それに、親父を置いていくわけにはいかない。
「早く逃げるぞ！」
　未だに音が鳴っているため、ブラストを出すことができず、父に肩を貸して自分たちの足で逃げようとすると、

「お前は先に行け」
「何言っているんだよ、一緒に逃げるぞ…？」
「僕はもう助からない。逃げたとしても、危険な薬を打たれたから、シンビオートなしじゃ生きられない…それに僕は人を殺してしまった…僕が死んだところでその人達が帰ってくるわけじゃないが、ここでコイツと共に死んだ方が世のためになる…」
「で、でも…」
「いいか、ワタル…お前は僕みたいになるなよ…そのシンビオートに寄生されたようだが、お前なら上手く共生できる。そして、その力はワタルの助けとなり、人の助けにもなるはずだ。」
　上手に使えよ。そう言いながら俺の目を見て、苦痛に耐えながらも真剣な表情で語り続ける。
「後、お前は意外とめんどくさがり屋なところがあるからな、しっかりな！ナナセちゃんとも仲良くするんだぞ！」
「な、なんだよ…それ…」
　思わず笑みが溢れる。
「よし、いい顔になったな…じゃあ、そろそろ、先に母さんのところへ行ってくるよ……元気でな、ワタル…見守ってるぞ……！」

親父はそう言って最後の力を振り絞り、俺を窓の方に投げ飛ばした。俺は咄嗟のことで反応できず、そのまま窓から飛び出してしまった。
「お、親父っ！待ってくれっ！」
飛ばされながら親父の方を見ると、笑顔でこちらに手を振っていた。そして次の瞬間、研究所の爆発とともに親父の姿が見えなくなった。
「あああぁぁぁー!!」
気づいた時にはもう遅かった。地面に叩きつけられて意識が遠のいていく中、最後に見えた光景は、燃え盛る炎だった。
「ここは……」
目が覚めると、見慣れた天井があった。
どうやらベッドの上にいるようだ。
体を起こすと、父の家だと言う事に気がついた。すぐさま飛び起き、家の中を確認するも、父の姿はなかった。すると、
『お前が気絶した後、俺が無理矢理お前の身体を動かして、ここまで運んだんだ』
「そうか…やっぱり夢じゃないんだな、あれ」
『お前の父親は…残念だった…すまない…』
「いや、別にお前のせいじゃないよ。それに、親父も笑って逝ったんだ…だから、悲しく

はないさ……」

俺はいつの間にか出ていた涙を拭きながら言った。

「それで、これからどうするか…」

『そうだな……。とりあえず、ここから出て、日本に行こう。ワタルの故郷なんだろ？そのあとはゆっくり考えよう。日本に行ったら、まずは腹一杯飯を食え！そうすりゃ元気も出る！』

「ははは、そうだな。ありがとう、ブラスト」

それから、俺は荷物をまとめて家を後にした。研究所の跡地で天国の親父に挨拶した後、日本に帰国した。その後は進学を諦め、親父の住んでたロサンゼルスではなく、家賃が安くて不便もなさそうなサンフランシスコへと引っ越して、デザイナーとなった。そして、親父の言う通り、この力を人のために使おうと、たまにヒーローまがいな活動をこの街ですることとなった。

これが俺の原点（オリジン）だ。

帰国

…これが俺の話を含めた、2年前の事件の概要だ。そう伝えると、唖然としていた。
「……本当に大変だったんだな…悪いな、気軽に聞いていいもんじゃなかった」
「いや、いいんだ。もう過ぎた事だし」
『意外と面白かったぞ、やるじゃないか。俺たちの方が良い話だがな！』
「はぁ…ヴェノム…不幸自慢じゃないんだぞ…じゃあ…俺の話ももう少し詳しく話すとしよう。最近のことも含めてな」
　そう言ってエディさんから語られた話に俺は開いた口が塞がらなかった。他にもシンビオートがいた事にも確かに驚いた。だが、ライフ財団がシンビオートの研究をしていたり、殺人犯にシンビオートが取り憑いたりした事に驚愕した。そんな修羅場を潜ってきたエディさんに心の底から賞賛を送っていると、
「なぁ、そっちは人を殺さないルールを設けたらしいが、どうやって生活してるんだ？チョコだけじゃコイツらは満足しないはずだ、人も食べてないんだろ？」
「そうだな、事件があったら首を突っ込むようにしてるのと、火を食べさせてる」
「火を？」

そう言って聞いてきたので、見せた方が早い思い、コンビニのライターを点けて、ブラストの口に近づける。
『お、こりゃ上手い火じゃねぇか!』
そう言ってライターの火を吸うように食べる。それを見た2人は
「おいおい、マジか…」
『相変わらずキメェな』
ドン引きしてた。まぁ、大概のシンビオートは火が弱点であるからそれも仕方がない。俺は少し気になった事をヴェノムに聞く。
「ブラストを知ってるようだけど、知り合いだったのか?」
『俺はこいつの事を知らん』
先にブラストがそう言う。ヴェノムは気にせず、
『コイツは俺がいた所でもかなり有名な奴だった。変なヤツだし、こうやって火を食べるからな。だが、実力は確かなモノだった。だから知ってた』
思わずブラストを見るも、一心不乱に火を食べ続ける。こいつはもしかして結構凄いヤツなのか…?そんな事を思っているとエディさんが気まずそうに、
「ああ…さっきの話に戻るが、俺たちは人を食べる事があるんだ。…といっても悪人だけだが……いや、言い訳にならないか…」

「俺は警察でもないし、別に気にしない。人を殺さないっていうのは俺のエゴだし、俺たちだけのルールだと思ってる。そっちは普段は耐えてて、食べるのも悪人だけにとどめてるんだろ？なら良いんじゃないか？」
　そう言うと彼は驚いた顔をして、
「そ、そうか…君は俺たちのことを非難するかと思ったが…」
　と言った。
『少しは話がわかるじゃないか』
「まぁ、俺もブラストと生活して長いからな」
　エディさんとヴェノムに言われ、そう答える。そのまま他愛のない話を続けていると、
『そういえば、なぜお前らは俺達の事を知っていたんだ？なぜ居場所がわかった？』
　ブラストが突然そう聞く。確かにそうだ。俺たちが行ったあの研究所は更地になったはずだし、さっきデータがどうとか言っていたが、どういう事なのだろう。エディさんの言葉を待つと、
「それはだな…クレタスの件が終わって、警察に疑われるようになったから、南国にでも行こうと思ってたんだ。そしたら、ヴェノムが、他のシンビオートをボコして、そいつを食べよう、なんて言い出したんだ。」

俺たちは思わず臨戦体制をとる。
「待て待て!それはヴェノムが勝手に言ったことだ!俺はとりあえず様子を見るだけにしようって言ったんだ!」
エディさんは続けて語っていった。まとめると、こうだ。
ヴェノムはライフ財団にいた時に他のシンビオート、ブラスト達が先に地球に来ていた事を知る。だが、ブラストの事を恐れていたため、特にアプローチをすることはしなかった。しかし、クレタスに勝利した後、共生してる自分達に敵はいないと思ったため、ブラストに勝負を仕掛け、あわよくば捕食してやろうと決意。
コンピュータにハッキングして、ネットとヴェノムの情報をすり合わせ、研究所のことを知り、俺に寄生している事までたどり着いてここに来たらしい。エディさんは戦闘することには反対で、まずは様子をみようと思い、俺たちが悪人であったなら容赦はしなかったという。
「それで、どうする?俺たちを食べるか?もちろん抵抗はさせてもらうが」
『ああ、綺麗な花火を咲かせてやるよ』
『あ?やるか?今の俺たちに敵うやつはいない!』
「だから待てって!!ヴェノムも落ち着け!君たちが悪人じゃない事は実際に見ても分かった!だから、戦闘する意思はない!」

「…分かった。ほら、ブラスト、爆発させようとするな」
　エディさんが必死に止めてきたので、俺も冷静になり、メンチを切っていたブラストを宥める。すると、エディさんが話を変えるように
「そうだ！ワタルは他のシンビオートの事知らないか？知り合いが寄生されてる、とか」
「いや、知らないな……というか、ブラストと親父に取り憑いたヤツ以外で、シンビオートを見るのが今日初めてだった」
　そう伝えると、
「そうか…実は情報を集めてた時に、気になる情報があったんだ。最近犯罪者がやたら減っている場所があるってな」
「…？良い事では？」
「確かに良い事だ。だが、こいつらからしたら、犯罪者なんてのは格好の餌だ。いなくなっても騒ぎにならないからな」
「そこにシンビオートがいると？だが犯罪者が減っているだけでは、理由が少し弱いんじゃあないのか？」
「ああ、もちろんそれだけじゃない。バックラーという企業を知ってるか？」
　バックラーといえば最近頭角を表してきた製薬会社だったはずだ。日本の企業だが、世界にも進出してきており、今後さらに大きくなっていくらしい。ニュースに疎い俺で

もさすがに知っている。そのまま続きを促すと、
「その企業の研究部が設立したと同時期に犯罪者の数が減ってきている。どういうことかもう分かるな?」
「バックラーがシンビオートを飼っていて、犯罪者を使って何かしているって言いたいのか?」
流石に強引じゃないか?そう続けようとすると、
「そのバックラーは研究者としてある男を雇っているらしい。そして、その男の前職は研究所の所長を務めていたそうだ」
まさか…!
「あの研究所か!?」
あまりにも出来すぎているがそう聞かずにはいられなかった。俺の言葉を聞いたエディさんは深くうなづいた。
「ワタルの話を聞いて確信に変わった。その男の死体は見なかったんだろう?なら、生きていたってことだ。そこでまた何かしているんだろう。調べるのに苦労したがな」
まさかあの研究所の所長が生きていたとは…施設もろとも爆破したと思っていたのに……そう考えていると、
「ここに来た後は、警察から逃げるのも兼ねて、そこを調べようと思ってたんだ。もし俺

の予想が正しければデカい事件になるはずだからな。どうだ？一緒に行くか？」
そう言って彼は誘ってくる。多分、俺の気持ちを察してそう言ってくれたんだろう。
あの時、俺の親父は所長に無理矢理薬物を投与され、シンビオートと結合させられたと研究員は言っていたはずだ。それが本当かどうか確かめないといけない。
「ああ、久々に日本に顔を出そうとも思ってたんだ。丁度いい。ご一緒させてもらおうかな」
俺は親父の仇かもしれない男に思いを馳せ、そう返事した。
「じゃあ決まりだ。じゃあ準備しておいてくれ。また来る。ほら、ヴェノム！なんでまた睨み合ってんだ！行くぞ！」
『おい！マジでコイツらと一緒に行くのかよ！俺たちで十分だろ!!』
「あんな話があったんだ、実際に行って知ってもらった方がいいだろ！」
そんなことを話しながら2人は家を出て行った。
「……大丈夫なのか……」
『さぁな』
俺の呟きに、ブラストは素っ気なく答える。
『だがアイツらは少なくとも悪い奴じゃないだろ。お前だってわかってるんじゃないのか？』

「まあ、確かにそうだが……」
『だったら問題はないはずだ。それにナナセにも会えるかもしれないぞ』
　そう言って、ブラストはニヤニヤしながら言う。
「別に俺はそんなこと期待してねぇよ」
『本当は会いたいんだろ？ナナセは可愛いもんな？』
「うるせぇ！」
　俺は恥ずかしくなり、思わず声を荒げてしまう。そんな事をしながら、準備をしたり、仕事を消化したりして、日本に出発する日になった。
　俺達は飛行機に乗り、日本への旅路についた。機内では、隣に座ったエディさんが話しかけてきた。
「そういえば、さっきブラストが言ってたナナセ？っていうのは誰なんだ？」
　ブラストは当日になってもナナセの事で俺をいじってきたので、エディさんも気になったようだ。ナナセの事を軽く説明すると、
「そうか、中々良い娘みたいだ。幸せにしてやれよ」
「ちょっ、エディさんまで何言ってんだよ!?俺とナナセじゃ釣り合わないし…」
「でも、嫌いじゃないんだろ？むしろ好きと見た。…ちゃんと想いは伝えておいた方がいい。些細な事がきっかけで関係が崩れる場合もあるからな…」

俺みたいに…。そう言って遠くを見つめていた。軽く話を聞いた時に知ったが、結婚寸前までいっていた女性と別れたらしい。

確かに俺はナナセの事が好きだ。

彼女が笑うと嬉しい。

彼女の笑顔を見ると元気が出る。

彼女と話すと心が弾む。

だが、その笑顔を俺のせいで曇らせたくない。もし俺が想いを伝えたら、彼女は受け入れてくれるかもしれない。でも、俺はあんな事があったし、これから普通の生活を送るのは難しいだろう。この生活に彼女を巻き込むわけにはいかない。彼女には普通の幸せをつかんでほしい。だから俺はこの想いを伝えないことにした。そんな女々しい事を考えながら、しばらく2人して黄昏ていた。

その後、飛行機は無事日本に到着した。

『ふう、やっと着いたな…ここが日本か…』

『…前回の時も思ったが…飛行機はかなり退屈だな』

機内で静かにしていたシンビオート達が疲れたようにそう言う。空港内の店などを物色してから、エディさんとは別行動する事になった。

「じゃあ俺は直接バックラーに訪問したり、色々調べたりするから、何かあったら連絡す

る。そっちも何かあったら教えてくれ！」

『おいエディ！早くその袋を開けようぜ！美味そうなもんがつまってる！』

と言って、空港内で買った商品が詰まった紙袋を両手に下げて歩いて行った。

俺はというと、久々に顔を出すのも兼ねてナナセの家に情報を聞くことにした。ナナセの実家なら、バックラーの事で世間には出回ってないような事も聞けるかも知れない。そんな思いでナナセの家に向かった。

発端

「はぁ～。やっぱり変わんねぇな……しっかし、いつ見ても豪邸だな」
『すごいな、俺たちのアパート何個分だ？』
と呟きながらインターホンを押す。
すると、中から
『はい』
と言う声が聞こえた。だが、俺の声を聞いた瞬間に
『今開けるから！』
と言い、ドアが開いた。
そして、出てきたのは紛れもなく、幼馴染みのナナセだった。相変わらず可愛いくて、綺麗だ。でも、いつもと違って、髪は下ろしており、可愛らしい服を着ていた。電話で会話はしていたが、久しぶりに顔を合わせるのでお互い照れてしまった。
とりあえず、家の中に案内され、リビングでコーヒーを飲みながら話を始めた。
「久しぶりだね。元気にしてた？」

「まあまあかな?ナナセこそ、どうなんだ?」
と聞き返すと、
「私も普通だよ。大学はちゃんと行ってるよ。あと、歌のレッスンとかもしてる。でも、最近忙しくなってきたからあんまり行けてないかも……」
と言った。
「そうか。悪いな、忙しい時に呼び出したりなんかして」
疲れたようにそう言った彼女に申し訳なくなり、素直に謝ると、
「大丈夫。私もワタルの顔見たかったし…2日前くらいに急に日本に帰るって連絡来た時はびっくりしたけどね」
とナナセは笑いながら言った。
「そうだ。これ、土産だ。みんなで食べてくれ」
と、お菓子が入った紙袋を渡すと、ナナセはありがとう!と言って受け取り、テーブルの上に置いた。
それから、ナナセはソファーに座っている俺の隣に座り、
「ところで、今日は何の用事で私の家に来てくれたの?」
と聞いてきた。俺は、
「ああ、実は聞きたいことがあってさ。この会社について調べてるんだけど、知ってるか

？」

と言い、スマホの写真を見せた。

写真にはバックラーという会社のロゴが写っていた。

すると、

「もちろん。バックラーでしょ？最近有名だもんね。主に日本でだけど、最近は世界にも進出してきたみたいだし。でもどうしてそんな事を？」

とナナセは聞いてきた。

「実は、俺の親父の事件に関わってるかもしれないんだ」

親しい人にはシンビオートの件は伏せているが、親父が研究所の爆破で亡くなった事は伝えている。なので、事件の関係者がバックラーにいるらしい。というざっくりとした事情を説明した。

「そうなの!?大変だったね…それで、この会社は怪しいと思うの？」

と聞かれたので、

「ああ、そこの研究部が怪しいと思ってる。まだ確証はないけど、一応調査しようかなと。ただ、日本の企業だから、こっちでは情報がなかなか得られなくて困ってたんだよ」

「分かった！私も調べてみるね！そうだ、パパにも聞いてみるね、何か知ってるかも知れないし！」

そう言って、ナナセは電話を手に取り、どこかにかけ始めた。
ナナセが電話をしている間に、さっきから『ほら、早く好きって言え』『隣に座ったぞ！チャンスだ！』などとほざいてるブラストを黙らせる。
相手は父親だったみたいで、すぐに話がついたようだ。電話を終え、
「今日の夜に会おうだって。大丈夫？」
と言われた。
「ああ、問題ないよ。ありがとうな。助かるわ」
と言って、ナナセの父親に会う約束をした。
その後、ナナセと一緒に昼食を食べ、夜まで一緒に過ごした。
ナナセの父親に会いに行く時間となったが、ナナセは
「私がいると話しにくい事もあるでしょ？2人で行ってきて？」
と少し寂しそうな顔をして、留守番をすることになった。
ナナセの父親は、とあるレストランの個室にいた。
俺が部屋に入ってきたのを見ると、軽く手を上げて挨拶をしてくれた。
「久しぶりだね！どうぞ座って。さあ、食べてくれ。料理はもう頼んであるから。もちろん好きなものを注文してもいいよ」
と言うので、俺は遠慮なく食事を楽しむことにした。

『やったな！パラダイスだ！』

そんな事を言う俺の中の食いしん坊とも食事を楽しみながら、俺は自分の状況を説明し、父親の事件について聞きたい事があると話した。

すると、

「もちろん協力するよ。私の方でも色々情報を集めていてね。バックラーの研究所については、うちの傘下にある会社が運営している。だが、最近になって、会社の人間以外が出入りしているという報告があったんだ。研究所内に入ったその人間はそのまま行方不明になっているらしい。何か裏で人体実験をしているんじゃないかって噂もあるが、真相は分からない。」

エディさんの言っていた通り、犯罪者を使って実験しているのだろうか？そう思いながら話を聞く。

「ただ、ワタル君の父が働いていた研究所の所長が在籍しているという話には裏が取れたよ。現在もバックラーの研究所で所長をしているらしい。私は直接会ったことはないが、名前を聞いたことがある。彼の名前は、カラン・ガードナー。私が調べたところ、彼は非常に優秀な研究者だったようだ。彼の論文は学会でも高い評価を得ていたよ。だが、黒い噂もある。非人道的な研究に手を染めようとしたらしく学会から追放されたらしい。追放後も独自にその研究を続けているとか……。まぁ、あくまで推測に過ぎな

いがね。」

そう言いながらも、どこか確信めいたものを感じているような口調であった。

「だから彼に会う時はくれぐれも用心したまえ」

警戒しておいて損はないからね。そう言ってナナセの父親は笑った。

食事を終えた後、ナナセの父親の車で家まで送ってくれる事になった。普段は運転手さんがいるらしいが、自分で運転したいと言って断ったらしい。助手席に座り、車が走り出す。

「ワタル君、君は本当に大きくなったねぇ。子供の頃から元気いっぱいの子だったが……もし良かったら、ナナセと結婚を前提に付き合ってくれないか？」

唐突にナナセの父親から言われた言葉に驚いた。

「い、いやいや、俺じゃあ釣り合いませんよ。それこそどこかの御曹司とかの方が…」

『おい、何言ってんだ。素直にはい、と言え！』

ブラストにもそう言われるが、彼女は俺なんかより相応しい相手がいるだろう。そう思った。しかし、ナナセの父親は首を横に振る。

「いやいや、ワタル君ほどナナセに相応しい男はいないと思うぞ。君もナナセもお互い幼い頃から知っているし、ワタル君ならナナセを大切にしてくれると思っている。どうかな？」

それとも何処の馬の骨とも知らない男に自分の娘を任せろというのかね。笑顔でそう言ってきたが、目が一切笑っていなかった。まるで脅迫されているようだった。
「これからも良い関係を築いていきたいと思っていますけど……ちょっと考えさせてください」
『はぁ…ダサいな…』
と相棒にも言われ、自分でも情けないとは思ったが、とりあえず答えを保留にした。
「ふむ…ではいい返事を期待しているよ」
そう言ってやっと俺にかかっていた重圧が霧散した。そんなところも親子なんだな、としみじみ思っていると、ナナセの家についた。車を降りて、ナナセの父親に礼を言う。
「今日はお忙しい中、ありがとうございました！早速、近いうちにバックラーの研究所に行ってみたいと思います！」
「ああ、何度も言うようだが、彼に会う時はくれぐれも気をつけるんだよ。…それとどこに行くんだい？今日は泊まっていくだろう？」
「いや、さすがにそこまでお世話になるわけには…」
「ほお…食事をご馳走した私のお願いが聞けないのかい？」
「うっ…ではお世話になります…」
よろしい、と言って満足そうに頷く。やはり親子だな…と再び身をもって実感した。

玄関に入ると、奥からナナセが走って来た。
「パパ、おかえりなさい！ワタルもおかえり！ご飯にする？お風呂にする？それともわ・た・ぐへぇ!?」
　最後まで言わせずにナナセにデコピンした。ナナセは涙目になって抗議してくる。
「酷いよぉ～せっかく出迎えたのに～」
「お前は何を言っているんだ。お前の父親もいるんだぞ」
「えー別に良いじゃん」
「良くない!!」
　まったく、こいつは昔から変わらないなと思いつつリビングに向かう。その間、ナナセの父親は優しく微笑んでいた。リビングに行くとナナセの母親もいて、挨拶をすました。
「ワタル君、ゆっくりしていってね。何かあったら遠慮なく言ってちょうだい」
「ありがとうございます。色々ご迷惑をお掛けしてしまって申し訳ないです」
「そんなに畏まらなくていいのよ。あなたもうちの子だったら良かったのにねぇ……」
　と何かを企んでいる目をしてナナセの母親は頬に手を当てながら言った。
　するとナナセの父親が声をかけてきた。
「ワタル君、先にシャワーを浴びてきなさい。その間に部屋を用意しておくから」

「すみません、何から何まで……。すぐに浴びてきます」
「いやいや、ゆっくり入ってきて構わないよ」
ナナセの父親に促され、俺は浴室に向かった。服を脱ぎ、身体を洗い、浴槽に浸かる。温かい湯が身体を包んでいく。
「ふぅ……」
思わずため息が出る。疲れが溶け出していくようだ。
今日は色々あったが、良い情報も得る事ができた。それにしても……
「ナナセがあんなに積極的だとはな……」
『惚れ直しちゃったか？』
「…うるせぇ」
今日のナナセは凄かった。昼食の最中、ずっと腕を組んできたり、唐突に膝枕してくれたり、挙句の果てには彼女の父親の前であんな事をいいだす始末だ。普段の彼女からは想像できない行動ばかりであった。
それだけ彼女が俺に対して好意を持っているのだと思うと、嬉しい反面恥ずかしい気持ちもある。そんなことを悶々としながら考えていると、いつの間にか時間が経っていたようで、かなり長居してしまった。
慌てて脱衣所に出て、バスタオルで体を拭き、用意してくれていたパジャマを着て、洗

面台でドライヤーを使い髪を乾かす。そして、リビングに戻ると、ナナセの父親と目が合った。
「ワタル君、すっきりしたかね。もう寝る時間だから、早くナナセの部屋に行きなさい」
「はい、ありがとうございます。それじゃあ、失礼しま……え？」
『お？』
今何と言ったのだろうか？ナナセの部屋？
「えと、すみません。ナナセの部屋って聞こえたんですが…？」
「ああ、そうだよ。ナナセも待ってるだろうから、早く行きなさい」
「いや、でも一緒の部屋で泊まるなんて聞いてなかったのですが……！」
「さっき決まったことだからね。他の部屋は空いてなかったから、しょうがないんだ。それとも家の娘と同じ部屋は嫌かな？」
再び圧をかけられそうになったので、すぐさま
「い、いえ、娘さんの部屋で眠らせていただきます。では…」
と答えるしかなかった。こうして、俺はナナセの部屋に案内され、ここで寝る事となった。部屋の前に立ち、
「いや、やっぱまずいだろ…」
『これはチャンスだ！ワタルの想いを打ち明けろ！そしていい感じのムードになったら

押し倒「ばか！そんなこと出来るわけないだろ！」
　そんな事を言っていると、部屋のドアが開き、
「…？誰かと喋ってた？」
　とナナセが出てきた。彼女はネグリジェ姿で、胸元が少し見えており、目のやり場に困ってしまう。
「い、いや、何でも無い！それよりどうしたんだ？こんな時間に」
「ん？ワタルを待ってたんだけど……」
「そ、そうか…一緒の部屋で寝るんだもんな…待たせて悪かったな……」
「ううん、全然大丈夫だよ！私も気持ちの整理したかったし……」
「そうなのか……」
「と、とりあえず部屋入らない？」
「そうだな、じゃあ、お邪魔しようかな…」
　そう言って中に入ると、すごく綺麗に物が整理整頓されており、きっちりとしていた。だが、ぬいぐるみなども置いてあり、女の子らしさも兼ね備えた可愛らしい部屋だった。
ナナセはベッドに腰掛け、俺は床に座る。
「……」
「……」

そのまま沈黙が流れる。気まずいなぁと思っていると、ナナセの方から口を開いた。
「ねぇ、こっちに来てくれない？」
「えっ!?」
まさかナナセから言われるとは思わなかったので、驚いてしまった。
「えっと、それはどういう意味で……？」
恐る恐る訊ねると、ナナセは顔を赤くして答えてくれた。
「……一緒に寝たいの」
「……」
思わず黙ってしまった。だって仕方ないだろう。好きな人が自分のベッドに来ないかと言っているのだ。断る理由などない。むしろ喜んで飛び込んでいくレベルである。
「ほら、早く来てよ……」
「わ、わかったよ……」
緊張しながら、ナナセの隣に行く。すると、ナナセが俺の手を握ってきた。そして、その手を俺の胸に持っていく。
「ちょ、ちょっと……ナ、ナナセ……？」
「ワタル、心臓バクバクじゃん……やっぱり私の事意識してくれてるんだね……」
ナナセの顔を見ると、真っ赤になっていた。おそらく彼女も勇気を振り絞って行動し

ているのだろう。だから、俺もそれに答えるべく彼女の手を強く握り返す。
「当たり前だ……ナナセみたいな可愛い子が俺と一緒に寝てくれるって言うんだぞ？俺の鼓動が速くならない訳が無いだろ……」
「ふふっ、嬉しい……」
ナナセは俺の体に抱きついてきた。柔らかい感触が伝わってくる。
「ワタル……」
ナナセが俺を見つめて来る。俺は目を瞑り、ナナセの唇を奪おうと顔を近づけると、
～～～♪♪♪　スマホが鳴った。
「……」
「……」
「ごめん、電話みたいだ……」
「う、うん、出ていいよ？」
『くそっ、良いとこだったんだがな！』
俺は急いで立ち上がり、画面を確認すると、エディさんからの着信であった。
「もしもし……エディさん？」
ブラストの言う通り、せっかくいい雰囲気になった所を邪魔された怒りと、彼女の事を諦めると言ったのに、いっときの感情に身を任せようとした自分の情けなさがごちゃ

混ぜになったが、なんとか電話に出た。
『ああ、急に悪いな。ちょっと不味いことになった…』
エディさんの焦燥しきった声を聞き、ただ事ではないと感じ取った。
「何かあったのか……？」
『実はさっきまでバックラーの事を調べてたんだが、突然襲われてな…』
「大丈夫なのか!?」
『ああ、いや、そいつらはもうヴェノムが美味しくいただいたんだ。問題はそこじゃない。ヤツら、いくら何でも気付くのが早すぎる。俺達が奴らに監視されていた可能性が大きい。それに……』
エディさんがそこまで言ったところで、家のインターホンが鳴った。
嫌な予感がして恐る恐る、部屋のカーテンから外を覗いてみた。そこには厳重な装備をした男達が立っていた。
俺はナナセに部屋から出ないように言って、急いで玄関に向かった。すでにナナセの父親が対応していたが、部隊のリーダーのような男が俺を見つけると、
「お前が今宮亘だな？大人しく投降しろ。そうすれば命までは取らない。」
どうやらエディさんの言う通り、俺たちの居場所はバレていたらしい。するとナナセの父親が

「なんなのだね、君たちは。こんな夜遅くにいきなり押しかけてきて。しまいにはワタル君に投降しろだと？」
　するとリーダーらしき男は、
「我々はバックラーの者だ。今宮亘、お前には我が社のデータを窃盗した疑いがかかっている。我々と一緒に来て貰おう。さもなくば、力づくで連れて行くぞ。」
　と言いながら、威圧してくる。
「ワタル君は我が家が預かっている。無理に連れて行くと言うのなら、今後、君たちの会社との関わり合いも考える必要があるが？」
　とナナセの父親は反論したが、
「黙れ。これは決定事項だ。お前が着いてこないと言うのなら、お前の周りの人間がどうなるのか分かってるだろうな？」
　と逆に脅しをかけてきた。
『どうする？この程度の奴らならすぐに片付けられるぞ？』
（いや、さすがにナナセの家族を巻き込むわけにはいかない。それに何でバレたのか知りたい。着いていってみよう）
　と、意識を集中させてブラストに告げた。
「分かった。大人しく投降するよ。だから、この人達には手を出さないでくれ」

と言った。

すると、彼らは満足そうにほくそ笑んだ。

「賢明だ。よし、ついてこい！」

と先頭の男が言い、車に乗せられ、俺は彼らに連れて行かれることになった。

悲劇

　車に乗せられ、俺は彼らに連れて行かれることになった。車が走り出して数分後、車内では俺に対する尋問がはじまると思っていたのだが、予想に反して何もしてこない。
　思わず俺から話しかけてしまった。
「おい、せっかく俺を捕まえたのに何も聞かないのか？」
「所長からは無傷で連れて来いとしか言われてないからな」
　リーダーらしき男はそう言う。しかし、どう考えてもおかしい。
　俺を捕らえたら何か聞いてくるはずだろう。
「ああ？データの窃盗とやらの件はいいのか？」
「お前が我が社を調べている事は知っていたからな、適当な理由をつけてついて来させてきたまでだ」
　目的を聞くためにもあえて挑発してみることにした。
「そんな事俺に言っても良いのか？あんたらを倒して、今すぐここから逃げてもいいんだぜ？」

「その時は研究所に連絡がいき、さっきの奴らを殺すだけだ。拘束はしないが、妙な真似はするなよ」
やはりそうきたか……まあ、想定内だが。
「それは困ったなぁ。じゃあどうすればいいんだ？」
「お前には所長の研究を手伝ってもらう。いや、お前たち、と言った方がいいか」
「っ……!?」
『なんだと？』
こいつ…俺がシンビオートと共生している事を知ってるのか…？案外まずいことになりそうだな…。そう考えていると研究所に車が着き、車から降ろされて歩かされる。
「さあ、着いたぞ。お前には所長にあってもらう。行くぞ」
そう言われて連れていかれたのは研究室だった。
そこは2年前の場所とそっくりで、いやでもあの時のことを思い出してしまう。
中に入るとそこには白衣を着た男が立っていた。
「ようこそ。私はここの所長を務めているカラン・ガードナーだ。よろしく。早速だが、君たちには私の研究を手伝ってもらう」
こいつが親父の研究所の所長か……今すぐあの事について聞きたかったが、ぐっと堪える。

「研究？いきなり連れてきて何を言ってるんだ。それに、アンタには俺が複数人に見えてるのか？」
　眼科にかかった方がいいぞ。と付け加えてそう言うと、
「とぼけなくてもいい。君がシンビオートに寄生されている事は知っている。私はあの時に見ていたからな。君がイマミヤ君と戦っていたのを。いや、親子である君もイマミヤだったか」
　俺たちはコイツに見られていたのか…どうやらもう隠す必要はなさそうだ。そして、俺があの事件からずっと聞きたかったことを聞く。
「ああ、そうだ。俺はシンビオートと共生してる。ただ、アンタに聞きたいことがある。本当にアンタは親父に劇薬を投与して、シンビオートを無理矢理寄生させたのか？」
　するとカラン・ガードナーはニヤリと笑みを浮かべた。そして、
「誰から聞いたのかは知らないが、その通りだ。彼は計画に反対したのでね。身をもって私の計画の素晴らしさを知ってもらおうと思ったんだ。人体実験の第一号として、ね」
　と言い、さらに続けて言った。
「彼は私の想像以上の逸材だったよ！薬物を投与したとはいえ、あそこまで動けるとは思えなかった。ただ、それ以上の天才が現れた…それが君だ。君はシンビオートと正に

一心同体だった。もう少し君たちの戦いを見ていたかったが、部下が独断で自爆スイッチを押してしまってね。逃げる羽目になった。もちろんその部下は始末したが」

こいつが親父にシンビオートを……こいつがいなければ……

『ワタル、落ち着け。怒りに呑まれるな』

ブラストに俺の感情が伝わっていたようで、そう言われる。少し冷静になり、

「…今更何で俺を呼んだんだ」

怒りを抑えてそう聞くと、

「ずっと君を探してはいたんだ。君が日本にいると思ってここで研究もしていたしね。だが、見つからなかった。そこで日本国内をくまなく監視する事にしたんだ。そしたら先日、君が空港から出てきた。すぐさま君を捕まえ、研究の協力を願おうと思ったんだ」

こいつは俺を実験動物か何かと勘違いしているのか？

「さっきから言ってる研究って具体的には何をしてるんだ」

「おや？ 興味が出てきたのかい？ 私はね、シンビオートを使って人類を進化させようと思ってるんだ。シンビオートを使えば人間は更なる高みへと到達する。これが成功したら、一人一人が強くなり、アベンジャーズなんていらなくなる。例えばこの私がそうだ。私はあの研究所の爆発の前、イマミヤの血液を採取していてね。試しにそれを打ってみたんだ。すると、頭の中から私以外の声が聞こえてきたんだ。」

そこで、カラン・ガードナーは俺の方に手を向けて、見覚えのある、ウネウネした触手のようなものを見せつけてくる。
「し、シンビオート…だと…!?」
「そう、私もシンビオートと共生する事になったんだ。まあ、最初は戸惑ったが、今では私の良きパートナーだよ。このシンビオートを私はクワッシュと呼んでいる。いい名前だろう?」
（まさかコイツもシンビオートに寄生されているなんて……）
『まずい事になったな。絶対に力を持たせちゃいけないイカれ野郎に力が渡っちまった』
俺の中でそんなやり取りをしていると、カランは続けて、
「私はこの力の素晴らしさに気づいた。そして、これを全人類に適合させ、進化に導こうとね。そこで、私の血を使う事にした。犯罪者達に私の血を流し、シンビオートに適応するか実験したんだ。だが結果は失敗ばかり。だから君にも手伝って欲しいんだ。君たちの血なら適合させられるかもしれない！」
「このイカれ野郎が！アンタのやってることは間違っている！」
「それは違うな。私は正しいことをしている。君は私に協力するべきだ。大丈夫、何も怖がらなくていい。全ては上手くいく。君が協力してくれれば、世界は進化するのだよ

！」

血走った目をしてそう言ってくる。本当に狂っている。

『もういいだろ、コイツをぶん殴ろう』

（そうだな。コイツに手加減はいらないぞ）

そう言って動き出そうとした時、

「おっと、君が私を攻撃するのならあの人達は死ぬかもしれないが、いいのかな？」

くっ……そうだった、今はナナセ達を人質に取られている。下手に動くと彼女達を危険な目にあわせてしまう。そう思い、渋々引き下がる。

「今日はもう遅い。実験は明日から始めるとしよう。ワタル君を連れて行きたまえ。おっと、待て。もしかしたら、彼が人質を無視して逃げるかもしれない」

そう言ってカランは自動車のスマートキーのようなものを俺の耳元に向けてくる。そして、スイッチを入れると、超音波のようなものが発される。

キィィィィィィィィン

『ぐあぁぁぁぁ!!!』

「ぐぅっ!!!」

俺は身体がまったく動かなくなり、ブラストも不快な音波に苦しんでいる。

「これはスターク社が開発した神経麻痺を誘発する装置でね。それを少し改良して、対

象を気絶、シンビオートにも効くようにさせてもらったんだ。ほら…連れて…行きたま……」

薄れゆく意識の中、カランの声がそう聞こえた。

目が覚めると、そこは見覚えのない部屋だった。手足は縛られていて動けなかった。

「くそっ、どうすればいいんだ…」

『どうする？拘束は簡単にとけそうだぞ』

「いや、ここで逃げたらナナセ達が危ない」

『…八方塞がりだな』

「……」

俺たちはその後も必死に考えたが、いい案は出なかった。そして、カランが研究員と傭兵を引き連れてやってきた。

「やあ、お目覚めかな？早速だが君の血をもらうとしよう。ほら、始めてくれ」

そう言って研究員に指示を出し、俺に注射針を刺してくる。

「やめろっ…くっ……」

俺は抵抗しようとしたが、拘束されていて動けず、そのまま血を抜き取られてしまった。結構な量の血液を採取され、少し眩暈がする。
「悪いね、だが、貴重なサンプルなんだ。遠慮なく大量にとらせてもらったよ。ではこの血液を適当な犯罪者に……」
「所長！報告が！」
傭兵が慌てて部屋に入ってきて、カランの言葉を遮り何か耳打ちする。そして、俺の方を見てニヤリと笑う。
「ほぉ…そうか。分かった、お前はここに案内して来い。…ワタル君、君は随分と愛されてるようだね。今、君の彼女がここに来たそうだ」
「彼女だと…？」
俺は少し動揺しながら言う。まさか、アイツじゃないだろうな……。
「ああ…確か、ナナセ、と言ったかな？」
嫌な予感が的中してしまったようだ。
「な、ナナセが何でここに…」
「大方、君を心配して、直接乗り込んできたんだろう。中々大胆じゃないか」
カランはいやらしい笑みを浮かべていた。
「お前ら、ナナセに何かしたらタダじゃおかないからな!!」

俺がそう言って睨みつけると、所長は鼻で笑った。
「ふん、君はもう少し状況を考えた方がいいんじゃないか？　自分がどういう立場だったか、忘れたのか？」
そうだった。今俺はこいつの手の上で転がされてる、ただのモルモットに等しい。
「まあいい。ただ、私は良いことを思いついた…！君の血液を彼女に流し込んでみよう、とね」
なっ!?　何言ってんだこいつ!!
「そしたらどうなると思うかね？犯罪者達は血液を流し込んだ途端、絶命していったが…果たして彼女はどうなるか…？」
「てめぇ…!!!」
『ナナセに手を出したら俺たちはお前をぶちのめすぞ！』
ブラストも怒りのあまり俺の身体から出てそう言う。
「君がワタル君に寄生してるシンビオートか…中々興味深い顔をしているなぁ」
カランがブラストを舐め回すように観察していると、部屋のドアが開き、傭兵と共に会いたかったが会いたくない人物が入ってきた。
「ちょっと！ここに本当にワタルがいるの!?ワタルに何かあったら絶対許さないから……ワタル!?大丈夫!?」

ナナセは俺を見つけるとすぐに駆け寄ってきた。
「ナナセ……」
「良かったっ!!無事だったのね!!本当に心配したんだから…」
涙交じりの声でそう言われるも、俺はナナセに、
「今すぐ来た道を戻れ！早く逃げろ!!」
と促すも、カランはそれを許してくれなかった。
「おっと、悪いね。君にも実験に参加してもらうよ」
と言いながら、注射器をナナセの首筋に当てた。
『「やめろぉっ!!」』
思わず叫んだ俺達の意思に反して、注射針はどんどん肌に吸い込まれていく。そして、血液がナナセの体内に流れ込んでいった。すると、彼女の体がビクビクと震え、痙攣し始めた。同時にアメーバのようなものが身体をところどころ覆っていく。
しばらくその状態が続いたが、ピタッと痙攣も止み、なにも起こらなくなった。
「ナ、ナナセ…？おい…嘘…だろ…？」
すると、カランはつまらなそうに
「はぁ…天才の彼女といえども、彼女にその才能はなかったか」
と吐き捨てるように言った。

それを聞いた俺たちの中で何かがプツンと切れた。
俺の身体をブラストが覆い、拘束を破る。そして、怒りに任せて拳を握りしめ、全力で地面を殴る……
その瞬間、大爆発が起こった。

幕引き

カランを中心に爆発が起き、爆風で傭兵や研究員が吹き飛ぶ。そして、周りの壁も破壊されていく。
「ぐあああっ！な、何だ!?」
「うわああっ！」
研究所は半壊し、あちこちから煙が立ち上っている。
俺たちはすぐに立ち上がって、爆発の前に抱き寄せたナナセの様子を見る。幸い脈があり、呼吸も出来ているようだったが、ピクリとも動かない。
「…ブラスト…ナナセは生きてるのか?」
『生きてはいるはずだ…ただ意識がないようだ』
ナナセの中に触手のようなものを入れて軽い検査をしていたブラストがそう告げる。
俺は少しホッとしたが、沸々と湧き上がってくる怒りは一切収まらなかった。
「いやぁ、中々な攻撃じゃないか。私じゃなかったら死んでいたかもな」
そう言って、いつの間にか紺色のシンビオートに包まれていたカランはこちらに歩い

てくる。俺たちはナナセを部屋の外の、比較的安全そうな場所に寝かせた。
「私のシンビオートは頑丈でね。あのヴイブラニウム並みの硬度を持つこともできる。いかに熱が弱点でも、あの爆発程度では……」
なにか言っていたカランを思い切りぶん殴り、爆破させる。
「ぐっ！お前！」
「俺は……あんたみたいなクズ野郎が一番嫌いなんだ」
カランの体に纏わりつくシンビオートを掴んで、投げ飛ばす。
壁に叩きつけられたカランは怒りに満ちた表情をしていた。
「貴様ぁ!!この私を侮辱するのか!?」
『うるせぇよ。さっきから聞いてりゃ、俺らのことを実験動物みたいに言いやがって……。ふざけんのも大概にしとけ……』
ブラストが凄まじい殺気を放ちながら言った。
「私は科学者だ！人類をより良くしようとしてるんだぞ!!お前達の犠牲など安いものだろう!!」
「誰かを犠牲にしようなんて考えた時点で、お前は終わってんだよ」
俺たちはさらにカランを殴る。だが、カランのシンビオートはとても硬く、爆破させても中々ダメージが通らない。

「黙れ!!協力するなら生かしてやろうと思ったが、お前たちの血は殺してから奪うことにしよう!やれ!クワッシュ!」
『ワガッタ』
そう言って盾のようなものを形成し、そのまま俺たちを押し込んで潰そうとする。
「ちっ」
俺達はそれを避け、クワッシュの作り出したシールドの壁を殴って爆破した。しかし、爆発させてもすぐに形が直される。そこで一旦距離をとって、作戦を練る。
(くそ……このままじゃ埒があかねぇな……)
『ああ、爆破してもすぐ再生されちまう。まいったな』
(何か手はないのか?)
『一気にアイツの防御を崩せるような、デカい攻撃をすりゃあいい。いいか…』
俺は少し嫌な予感がしたが、ブラストの言う作戦にのった。
(はぁ、分かった。それで行こう)
『いいか?しっかりやれよ?行くぞ!』
そう言って、俺たちはカランにもう一度殴りかかる。
「はっ!馬鹿の一つ覚えだな!!そんなことでクワッシュの防御は破れんよ!」
そう言って俺たちが殴ってくるのを気にも止めず、逆に殴りかかってきた。しかし、

その拳にブラストが纏わりついていき、
「馬鹿はテメェだ!!…ブラスト!今だ!!」
『オラァ!!吹き飛べ!!』
ドガアアンッ!!!
再び大爆発を起こした。
『ギャァァッ!?』
断末魔が響いたが、どうなったか分からない。
少し距離を取り、様子を見ていたが、爆煙の中からカランは出てきた。
傷を負ってはいるが、どれも致命傷には至らなそうだ。
「無駄だと言っただろう?確かにクワッシュは焦げてしまったが、少しすれば復活する。でも、君は今のでシンビオートの大部分を爆破させてしまったはずだ。もうクワッシュとやり合えるほど残ってないんじゃないか?」
そんな事を言いながら、余裕そうな表情をしていたカランを思い切りぶん殴る。
「なっ!?…ぐへぇっ!」
カランは痛みに耐えきれず、苦悶の表情を浮かべた。
「クワッシュとやらが復活するまでもう少しかかるんだろ?じゃあ、俺と2人きりで遊ぼうぜぇ!」

ブラストの作戦はこうだった。
まずブラストが俺の中に、ギリギリ生き残れるくらいの量の体細胞を残し、クワッシュを道連れに自らの大部分を爆発させる。
それで倒せない場合はクワッシュが戻る前に俺がカランを叩きのめす、というものだった。
そして、何発か拳を入れると、カランは地面に倒れ込んだ。
「くそぉ……」
「まだ意識はあるみたいだな？じゃあ、これで終わりだ！」
俺はカランを殴ろうとした。
だが、突然、目の前に紺色の影が現れて、カランを守るように俺の拳をガードした。
「おいおい、嘘だろ…あの爆発食らって、もう再生したのかよ…」
『カラン、マモル』
「クワッシュ！よくやった！」
そう言って再びカランはシンビオートに覆われていく。
「…おい、ブラスト！お前ももう復活してたりしない？」
『悪いな、こうやって喋るので精一杯だ』
「俺1人で勝てると思うか？」

『……』
「いや、黙るなよ。嘘でも勝てるっていえよ」
そんな事をしていると、カランがこちらに突っ込んできていた。
「危ねっ!?」
俺は咄嗟に身を翻し、間一髪避けることができた。
しかし、次の瞬間。
「死ねぇっ!!」
「がぁッ……」
腹に激痛が走った。
見ると、シンビオートの腕のようなものが伸びて俺の体を貫いていた。
『おい！ワタル!!大丈夫か！くそっ、今すぐ俺が再生してやるからな…！』
「あ”……がァああ!!」
ブラストにそう言われるも、あまりの痛みに叫ぶことしかできなかった。
「ははは!!無様だな!!」
そう言って俺の身体をそのまま持ち上げる。そしてそのまま地面に叩きつけた。俺は口から血を吐きだしてしまった。
「ぐッ……」

「私こそが最強だ!!」
そう言いながらまた何度も蹴りを入れてきた。
意識が飛びそうになる。
その時だった。
ギィィィィィン‼?
「な、なんだっ!?」
『グェッ…ウルサイ…!』

突然空気を断ち切るような鋭い音が聞こえ、カラン達は思わず後退り、俺たちはその場に蹲る。
「ぐっ…」
『くそっ…再生も間に合ってねえって言うのに…!』
すると、水の底から発せられたもののように、重い響きを伝える声が聞こえてくる。
その音ともにカラン達は吹き飛び、壁に叩きつけられる。
「ぐぅっ!?なんだ、衝撃波か!?」
『イ、イタイ…』
何が起こっているのか分からなかったが、すぐに体勢を整え、ブラストに再生に集中

するように呼びかける。
（ブラスト！よく分からないが、チャンスだ！再生してくれ！）
『ああ！まかせろ！』
　その時、再び衝撃波を伴った声がカラン達を襲うが、今度は避けられ、声の聞こえた方に腕を伸ばして攻撃する。その攻撃は失敗に終わったようだが、声の主が部屋に入ってくる。
「な、なんだと!?」
「シンビオート……!?」
　なんと、先ほどからカランに攻撃を仕掛けていたのは、シンビオートだったようだ。メタリックブルーのような色味をしており、女性らしい体つきをしている。
　そのシンビオートは俺をチラリと見た後、カラン達を睨みつけ、攻撃をはじめた。
『オデタチノジャマヲスルナ！』
　そう言いながらクワッシュは右腕を刃物のように変えて、斬りかかろうとするも、シンビオートの口から発せられる衝撃波によって防がれ、逆に吹き飛ばされる。
『グゥッ……！』
「くそっ！なんなんだこのシンビオートは！クワッシュ！早く叩きのめせ!!」
　カラン達が喚いている間に、俺は急いで立ち上がり、距離を取る。

シンビオートはクワッシュの腹部を蹴って地面に叩きつけると、次は左腕をムチのように変えて、俺の方に向かってくる。
咄嗟に避けようとするが、ムチに脚を絡め取られ、掴まれてしまう。
「離せ！くそっ!!」
『この野郎!!』
そのまま持ち上げられてしまい、壁に叩きつけられると思いきや、ゆっくりと抱きかかえられる。
『大丈夫か～？』
なんとシンビオートが話しかけ、こちらを心配してきた。
「あ、ああ……ありがとう、でもなんで俺たちを助けた？」
するとシンビオートは
『親孝行ってやつだ。オヤジ殿』
「親孝行？オヤジ？何を言ってるんだ…？」
俺の頭の中で何かが引っかかった。
そして、思い出す。俺の血が抜かれ、その血でシンビオートと結合させようとしていた事を。
まさか…

「ナナセ……なのか？」
　そう聞くと、シンビオートはニヤリと笑い、
『ああ、正解さ。ただ、ナナセはまだ眠っている。オレが無理して動かしているだけだ。対話した時にナナセがお前を助けたいと強く想っていたからな』
　と言って、ブラストの方を向き、
『オヤジ殿、そろそろ再生したんじゃないか？』
　と聞いてくるが、ブラストは
『俺は少し再生が遅いんだ。良い感じの炎でもありゃ別なんだが……というか、俺をオヤジと呼ぶな！勝手に生まれただけだろ!!』
　とシンビオート達がごちゃごちゃ話していると、カラン達が起き上がってこちらを睨みつける。
「なるほど、実験は成功だったか……しかし、躾がなってないなぁ。飼い主に楯突くとは……殺すしかないようだ!!」
　と言って突っ込んでくる。
『オレの飼い主はナナセだけだ。テメェなんて知るかよ』
　ナナセを気に入ったような言い方をするシンビオートはそう言い捨て、カラン達と戦闘を再開する前に、こちらに何かを投げ渡してきた。

『オヤジ殿！それは外にあった何かの装置の燃料だ！良い火種になるはず！使ってくれ!!』
「ありがとう！」
『やるじゃねぇか！クソガキ！』
俺たちは礼を言いながら、シンビオートが投げてきた筒状の物体をキャッチする。
そして、少し再生したブラストが俺の身体を覆っていく。
『よし！いくぞォ!!』
（やってくれ！ブラスト！）
筒状の物体を手のひらで爆発させる。すると、俺たちを中心に火柱が上がり、轟音と共に爆炎が広がりかけるが、ブラストが全て吸収していく。
「なっ!?」
『ナ、ナンダ!?』
シンビオートと戦っていたカラン達は驚いている。そりゃそうだろう。いきなりこんなことをしたら誰だって驚く。
ブラストはどんどん元の体に戻っていき、最終的には一回り大きくなった。
『たまんねぇなァ!!これで完全復活だァ!!』
俺たちは、カラン・ガードナーに向かって駆け出す。

『おいッ!!クソ野郎!!こっちだ!!』
ブラストが叫ぶ。
「クソが……調子に乗るんじゃあない!!」
カラン達のパンチを避けながら、足払いをする。
しかし、カラン達はそれをジャンプして避け、俺たちの顔を思いっきり蹴ってきた。
その瞬間、蹴られた顔面を爆破させ、蹴り足を燃やす。
『アヂィッ!?』
「何をやってる!!このポンコツが!!」
カラン達はバランスを崩し、地面に倒れた。カランはクワッシュに怒鳴り、段々と冷静さを失っているようだった。
『オレも忘れんなよ!!』
ナナセに取り憑いたシンビオートもカラン達に追撃していく。
クワッシュは必死に防御していたが、爆破と音による挟撃により、硬度を保てず、再生も間に合わなくなっていった。
「クソッ!まて!!クワッシュ!何をしてる、この役立たずが!!」
『グッ…グェッ!ウゥッ!?』
クワッシュが剥がれていってるカランを殴り続ける。そして、

『「終わりだぁっ!!」』
俺たちはありったけの力を込めて、ぶん殴り爆破させた。
爆発によって発生した煙が晴れると、クワッシュと完全に分離したカランが倒れていた。俺らはそれを見て安心していた。
だが、その時だった。
『グァァァッ!!』
クワッシュが突然動き出し、襲ってきたのだ。
ギィィン!!!
『あらよっと』
しかし、ナナセのシンビオートが音圧でクワッシュを封じ込めた。
それを見た後、俺はカランに近づく。
コイツはたくさんの人を殺し……親父も殺した……そして、ナナセにも危害を加えた…。俺はコイツを絶対に許せない。
「おい、起きろ。最後に言い残す言葉はあるか?」
「う、うぅ……?ひ、ひぃっ!?ま、待ってくれ!!私は悪くないんだ!!シンビオートに操られていたんだ!!!」
「黙れよ」

先程の爆破で黒焦げになった肩を思い切り踏みつける。
「ぐあぁッ！い、痛い……」
「今度はシンビオートのせいにするのか…もういい。消えてくれ」
そう言って頭蓋を踏みつけようとした時、急に足が動かなくなる。
「…ブラスト。なんで止めるんだ」
『殺しはしない。それがルールのはずだ』
「だが、コイツはどうしようもないクズだぞ」
なぜ止めるんだ…コイツは世界にとってもいない方がマシなはずだ。ここで殺すべきだ。
『確かにコイツはクズだ。だがお前が手を汚してまでコイツを処理する必要はない』
「でもコイツは俺がここで殺さなきゃ…」
『お前の父親はそれを望んでいるのか？』
「っ……!!」
『俺たちの力は何のためにある？』
「……人を助けるため……」
『これは人を助けるためか？お前の勝手な復讐心なんじゃないか？そんな気持ちでコイツを殺すのなら、お前はコイツと同じだ』

ブラストの言葉が俺の心に響き渡る。だが、まだ俺はコイツを…

「ワタル!!」

「!?」

突然呼びかけられ、後ろを振り向くと、そこにはシンビオートに覆われていない、さっきまでのナナセがいた。

「……」

ナナセは黙って俺を見つめている。

「ナナセ…無事だったんだな…。少し待っててくれ、俺はコイツを…」

「待って!!……私にはワタルに何があって、どうしてこんなことになってるのか、全然分からないけど…本当にそれで良いの?」

彼女は俺の手を掴み、真っ直ぐ見据えた。

「私はね、ワタルのことが好きだよ。ずっと前から。でも、今のワタルは私の知ってるワタルじゃない」

そう言うと、彼女は涙を流しながら続けた。

「ねぇ、お願いだから元に戻ってよ……いつもみたいに笑って、一緒に帰ろ? 大丈夫! きっとなんとかなるからさ!」

俺は彼女の手を振り払った。

「…ありがとう。でも俺は……」
「今のワタル、すごく辛そうに見えるよ…そこまでして、する事なの？」
彼女が俺の顔を見つめてくる。
その瞳からは涙が溢れており、俺を抱きしめてきた。
とても優しく、包み込むように……。
その温もりを感じているうちに、なぜか懐かしい気持ちになった。心地よいと感じてしまう。彼女の体温を感じる度に、心の奥底から何かが湧き上がり、黒い気持ちがどんどん薄れていく。
「……分かった…」
俺はそう呟いた。
彼女は涙を流しながら、笑顔を浮かべる。

その時だった。

「か”ぁ”っ……!?」
『なに!?』
「ワタルっ!?」

急に体が重くなり、全身が痛み出した。心臓の鼓動が速くなり、息苦しくなる。視界がぼやけていき、目の前にいるはずの彼女が見えなくなる。

「はっはっは!!隙を見せたな!!」

どうやらクワッシュとこっそり結合したカランが俺を後ろから攻撃したらしい。

俺の胸には鋭い刃のようなものが突き刺さっていた。

『ワタル!?大丈夫か!?治してやる!!』

ブラストの声が頭に響く。

「アンタ…よくも…!!」

『くそっ!あのクワッシュとかいうやつ、オレの音波を受けたのにまだ動けたのか!?』

ナナセとそのシンビオートがそう言って、再度カランを攻撃しようとした時、何者かが凄い勢いで走ってくる音が聞こえた。そして、黒い影が一瞬にして現れる。

それは黒いシンビオートだった。

『なんだ?この状況?……ん?おい!ワタルとかいう奴が刺されてるぞ!!こいつは悪い奴だろ!!』

そう言って黒いシンビオートはカランを地面に叩きつける。

「ぐぅっ!?まだシンビオートがいたとは…!!なんなんだ!お前達は!?」

カランは苦痛に顔を歪めながらも、必死に抵抗しようとする。

だが、先程のダメージが効いているようで、されるがままだった。
そのままカランは体を掴まれ、黒いシンビオートの顔の前まで持ち上げられる。
黒いシンビオートは顔の半分を曝け出し、中の人間と共にこう言った。
『「俺たちはヴェノムだ」』
「ま、待て！なにをする気だ!?やめろ!!やめろぉっ!!やめろぉぉぉぉ!!!」

『不味いな。錆びた鉄の味がする』
そう言ってクワッシュごとカランの頭を食べてしまった。
「まじかよ……」
ブラストに胸の傷を治してもらいながら、思わずそう呟いてしまった。
黒いシンビオートが体の中に戻っていき、中からエディさんが出てきた。
「よお、その傷、大丈夫か？あ、あと今の奴は食って良かったんだよな？悪人だろ？」
「いや、別に良いんだが…まぁ、うん…」
さっきまで悩んでいたのが嘘のように、あっさりとカランは食われてしまった。
その事実に非常に微妙な気分になっていると、
「ね、ねぇ、ワタル。その人知り合いなの…？」
カランの方を見ないようにしながら、俺に聞いてきた。

「ああ、この人はエディさん。ここを調査するのを手伝ってもらってたんだ。で、今見た通りシンビオートに寄生されてる」

へ、へぇー。と少し引いた感じでエディさんの方を見るナナセ。

「ワタル、シンビオートに寄生されてる知り合いはいなかったんじゃないのか?そこの娘の後ろにヴェノムみたいなお友達が見えるんだが?」

「そ、それはな……」

と説明しようとした時、ヴェノムが

『おい、こんなところで呑気にしてて良いのか?』

「そうだった!2人とも早く逃げるぞ!騒ぎを聞きつけて警察が集まってきてる!!」

「えっ!?」

そう言われて、俺たちはすぐに逃げる準備をする。

あっけないカランの終わり方に、俺は複雑な気持ちになりながらも、エディさんとナナセ達と共に研究所から脱出することにした。

実り

しばらくして落ち着いた後、俺たちは研究所から離れた所にある、洒落た雰囲気のカフェで話すことになった。
「改めて、俺はエディだ。記者をやってる」
「ナナセです。大学生です。よろしくお願いします」
という感じで軽い自己紹介を終え、お互いの事を話していった。
「それで、いったい何があったんだ？」
と聞かれたので、電話の後のことから、今までの経緯を話す。
するとエディさんは開いた口が塞がらなかった。無理もない。まさか俺もあんな事になるとは思わなかった…
今度は逆に、
「エディさんはどうして研究所に？」
『そうだな。なぜいいとこ取りだけしたんだ？』
悪態をつくブラストを咎めながら聞く。

「あの前に電話をかけてただろう?でも途中から声が聞こえなくなったからな。おかしいと思って、ヴェノムに位置情報を辿ってもらったんだ。それで、あそこに辿り着いた。途中で電源が切られていたから探すのに苦労して、着いた時にはもうほぼ終わっていたが…」

と申し訳なさそうに言うエディさんに、助けに来てくれた感謝をしっかりとする。今度はナナセに

「そういえばナナセのシンビオートはどんな奴なんだ?なんか音を出していたが」

俺がそう聞くと、

『エコーだ。エコーと呼べ』

とナナセの後ろから少し顔を出してそう言った。

「エコーはすごく耳が良くて、超音波とかを出すことができるんだって」

ざっくりとした説明だった。するとエディさんが心配そうに

「ナナセは大丈夫なのか?その…エコーが人を食べたり…とか?」

そう聞いたが、エコーが

『オレはオヤジ殿達と違って、少量のアドレナリンで生きていけるからな〜。後はドーパミンもオレはイケる。オレ的には音楽を聞いた時にでるやつが1番ウマい』

と言ったのを聞いて安心していたが、

「じゃあ、人の頭を食べたがる怪物はヴェノムだけか？」
肩を落とし、すごくがっかりしていた。
するとエコーがおちゃらけた口調でこう言った。
『別にオレだって人を食べても良いんだぜ～？』
「だーめ、そんなことしたら私の体から出ていってもらうから！」
『そんなこと言うなよ～冗談だろ～』
そんなやりとりをしている2人を見ながら、俺は研究所を脱出してすぐの事を思い出す。
実はあの後、ナナセにシンビオートの危険さを教え、取り除こうと思ったのだが、エコーはもちろん、なんと、ナナセからも反対されてしまった。
エコーはナナセと相性が良かったらしく、ナナセをえらく気に入っており、ナナセは「だって、これでワタルと一緒になったんでしょ？これでワタルと同じ景色が見れるかもしれないし……それに、この子、私とワタルの子みたいなものだから…」と、ちょっとヤバい目をしながらとんでもなく恐ろしいことを言っていた。
確かに俺の血から生まれたものだが……。
ちなみにその時に俺とブラストの出会いなども詳しく話しておいたのだが、「なんで私に相談しなかったの！」と泣きながら怒られた。

そんな事を思い出しているとヴェノムが顔を出し、
『やっぱり、コイツも変な奴だな。まともなのは俺だけか』
そう言うと、ナナセの背中から青い触手が伸びて、
『なんだ?やんのか?黒いの!』
とエコーが煽りはじめる。すると、
「エコー?」
ナナセが笑顔で言う。もちろん目は笑っていない。
それを聞いたエコーはすぐにナナセの体に戻り、
『わ、悪かった……』
と謝っていた。
『エディ、今の目を見たか?あれは何人かやっている目だった』
「ああ、ナナセは怒らせちゃいけないな…」
ヴェノムとエディさんはナナセの圧に恐怖しているようだった。
俺たちはその光景を見て思わず笑ってしまった。
それを見たナナセは
「ちょっとワタルー・ブラスト!笑ってる場合じゃないんだけど」
と俺の腕を掴みながら言う。

「ははは、そうだな」
『ふっ、悪かったな』
と言いながらも、やはり面白い。
そうして、俺たちはしばらく会話を楽しんだ。

その後、俺たちはナナセの家に向かい、無事だと言う事を報告しにいった。
ナナセの両親は俺のことを相当心配していたらしく、俺を見た瞬間抱きしめてきた。
久々の家族の温もりというものを感じて、少し泣きそうになったのは内緒だ。
だが、ナナセは俺が連れ去られた事を聞いた後、無断で研究所に来ていたそうで、両親に叱られていた。
ちなみにナナセはエコーの事を家族に隠すことにしたそうだ。彼女が決めた事だし、俺はその事には口を挟まなかった。また、これを機に一人暮らしを始めてみるとも言っていた。
そして、ナナセの父親はあの夜の事が相当頭に来ていたらしく、バックラーを乗っ取り、父親の会社が直々に運営しようとしているらしい。バックラー全体が悪いわけではないのだが、これでより良くなっていくのなら、それでいいはずだ。

そしてその数日後、エディさんはナナセにも連絡先を渡し、一足先に日本を飛び立っていった。
どうやら、バックラーの傭兵相手に暴れた際に、日本の警察にも目をつけられたらしい。
また、バックラーの事を匿名で記事にするようで、以前話していた南国にでも行き、そこで記事を書くのだろう。

そんな風に考えていると約束の時間が来た。俺は今日アメリカに帰る予定なのだが、ナナセが空港まで見送りに来てくれるというのだ。
「ナナセ、わざわざありがとな。しかも夜に」
「ううん、全然大丈夫だよ。それより、もう帰るんだね……寂しくなるよ。せっかく会えたのにな～」
ナナセが悲しげに言う。
「ああ、でもまた会いに来るさ。その時はナナセの歌を聞かせてくれないか？」
ナナセは一瞬キョトンとしたが、すぐに笑顔になった。
「もちろん！今度は私がワタルに会いに行くから！」
「ああ、待ってるよ。…ちょっと展望デッキの方で夜景でも見ないか？」

ナナセが首を傾げる。
「え？別に良いけど……」
急にこんな提案をした俺にナナセは不思議そうな顔をしていたが、２人で展望台に向かった。
「綺麗だね～こんな所があったなんて知らなかった。私達以外誰もいないみたいだけど、貸し切り状態じゃん。なんか得した気分かも。あ、ワタル、あれ見て、滑走路がすごく鮮やかだよ。まるで光の絨毯だね」
そう言ってナナセが微笑む。
「本当だ。この景色をナナセと見れて良かったよ。ずっと覚えておきたいくらいだ。ところでナナセ、俺、君に伝えないといけない事があるんだけど、聞いてくれないか？」
ナナセはこちらを向いて少し驚いた顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻った。
「何？改まって。なんでも聞くよ？」
少し緊張してきた。深呼吸をして心を落ち着かせる。そして言った。
「ナナセ、好きだ。付き合ってくれ」
「……え!?それってどういう意味の好き、かな……？」
ナナセは少し戸惑いながら訊いてきた。

「恋愛対象として、好きなんだよ。ナナセといると楽しい。ナナセと一緒にいると、安心できる。それにナナセの歌声を聞いてると元気になるんだ。だから、その……俺と、結婚を前提にお付き合いしてくれないか？」

ナナセはしばらく呆然としていたが、やがて口を開いた。

「……嬉しい。凄く。だって、ワタルの事が好きだったから。私もワタルと一緒だと凄く楽しくて、ワタルといると凄く幸せになれるの。ワタルの事が大好き。愛してる。だから…こちらこそよろしくお願いします」

というか、私、あの時にもう告白みたい事言っちゃってたしね。

と加えて言い、ナナセは目に涙を浮かべていた。

俺はナナセを抱き寄せた。ナナセは驚いていたが、受け入れてくれた。

そのままキスをした。ナナセの唇はとても柔らかくて温かかった。

しばらくして、俺たちはお互いの気持ちを伝え合った事でより一層距離が縮まった気がした。すると、今まで空気を読んで静かにしていたシンビオート達が

『よくやった！ワタル！俺の言った通りだったろう!!』

『ナナセ～良かったな～!!』
と俺たちを祝福してくれた。しかし、幸せな時間ももう終わりのようで、飛行機の出発時刻が近づいてきていた。
「もしかして、もう時間？」
ナナセが時計を見てそう言う。
「ああ、そうみたいだ。そろそろ行くよ」
するとナナセが抱きついてくる。
「ナナセ、どうしたんだ？」
「んー、もう少しだけこうしてたいなって思って……」
そう言って、ナナセは顔を赤らめながら上目遣いで見つめてくる。
可愛いすぎるだろ。このまま連れ去りたいくらいだ。
そんな衝動に駆られそうになるが、なんとか堪えて、
「わかった。でも、そろそろ行かないと…」
と言うと、
「うん……そうだね。じゃあ、最後にもう一回だけしていい？私からしたいの！」
と言ってきた。断る理由なんてない。
なので、

「分かったよ、ナナセ」
と答える。すると、ナナセは目を瞑ってキスしてきた。
彼女の柔らかい唇の感触を感じつつ、ナナセの体温を感じる。
そして、ナナセが舌を入れてきたので、それに応えるようにこちらも絡める。そのまましばらくお互いに求め合い、やがてゆっくりと離れる。名残惜しさはあったが、いつまでもこうしているわけにはいかない。
俺はナナセに軽く口づけをして、それから言った。
「ナナセ、また会いに来るから。今度はもっと長く一緒に居よう。だから待っていてくれ」
ナナセは俺の言葉を聞いて嬉しそうな表情を浮かべた。
「ありがとう、ワタル。ずっと待っているから。それと、私の方からも会いに行くから！絶対だよ？」
と彼女は答えた。
「ああ、約束する。必ずまた来るから。それまで元気でな。愛しているよ、ナナセ」
そう言って、彼女を抱きしめる。
「私も。大好き。また会おうね、ワタル」
ナナセも抱き返してくる。

それから、シンビオート達も
『じゃあな！オヤジ殿!!今度会う時はオレの方が強くなってるかもな!!』
『はっ、寝言は寝て言え！……またな、クソガキ!!』
と言って挨拶を交わしていた。
それから俺は飛行機の搭乗ゲートに向かう。
その途中で後ろを振り向くと、そこには笑顔のナナセがいた。
彼女と目が合うと、ナナセは小さく手を振ってくれたので、それに応えてから前を向いて歩き出す。こうして、俺たちは別れたのだった。

機内で俺は自分の唇を指でなぞり、ナナセの温もりを思い出しながら、これからの事に思いを馳せる。色々なことがあったが、もうこれ以上事件に巻き込まれることは避けたいものだ。そんな事を考えていると、
『ワタル、いくらナナセが恋人になってくれて、キスが良かったからって、流石に何度もそれをするのはキモいぞ』
とブラストに言われ、普通に傷ついた。

それから俺たちはいつもの日常に戻った。

犯罪者を倒したり、仕事をこなした後、犯罪者を捕まえたり、ナナセと電話したり、犯罪者をボコしたり……そんな毎日を続け、年が明ける。

２０１８年

それは俺たちにとって……いや全人類、全宇宙にとっての、さらなる悲劇の幕開けだった。

ＩＮＦＩＮＩＴＹ　ＷＡＲ
開戦

ある日、ふとカレンダーを見るとナナセの誕生日が近いことを思い出した。
「そうか…もうすぐナナセの誕生日か…」
と思わず呟くと、
『付き合ってから初めての誕生日だもんな。なにかプレゼントは考えてんのか?』
俺の首から顔を出したブラストがそう言ってきた。
プレゼントか…考えてなかったな、何を送ればいいだろうか。しばらく考えていると、
『じゃあ、ちょっと遠出してみないか?その先で何か見つかるかもしれないからな。最近、仕事ばかりだったから羽を伸ばすのにも丁度いいだろう』
ブラストがそう提案してきた。
確かに最近はずっと仕事続きで疲れていたし、息抜きをしたいと思っていたところだった。だから俺はブラストの提案に乗ることにした。

「そうだな。たまにはそういうのも悪くない。だが、どこに行くか…？」
俺がそう言うと、ブラストが答えた。
『それならいい場所を知ってるぜ』
「本当か、どこなんだ？」
『ニューヨークだ。前行った時に洒落た店がたくさん並んでただろ？そこならナナセに合うものが見つかるんじゃないか？』
少し遠いが、確かにいいかもしれない。ブラストの案に賛同していると、
『それに、あのタイツマンにも会えるかもしれないしな！』
と付け加えた。
そんな奴いたなぁ…と思いつつ、ひとまずは今日の分の仕事を片付ける事にした。

そして数日後、俺たちはある程度計画を立てて、飛行機に乗り、ニューヨークに向かった。空港に到着し、荷物を受け取り、タクシーに乗って、適当な通りへと向かった。
タクシーの中で、ブラストが言う。
『久々だな！ここに来るのも。相変わらず賑わってんなー』
俺は窓から見える景色を見ながら、そうだな、と相槌を打つ。

その後、色々な店へと向かい、様々な商品を見て回った。途中、ショーウインドウ越しに見えたネックレスが目に入り、思わず店内に入る。
プレゼントとして無難すぎるな、とは思ったがナナセに似合いそうなデザインだったので購入することにした。
店員さんが綺麗にラッピングしてくれたので、それを内ポケットに大切にしまった。
『中々良いのを買えたじゃないか』
「ああ、ナナセが喜んでくれるといいんだが…」
『大丈夫だ、絶対に喜ぶ。俺が言うんだから間違いない』
その後もブラストと相談しながら、店を周り、服やアクセサリー、靴など、ナナセが気に入りそうなものを探していく。

それはある店から出てきた時だった。
突然、俺たちの足元を囲うように火花のようなものが円形に散る。
「うおっ!?なんだこれ!?」
『とりあえず逃げるぞ!』
「そうだな……って、うわっ!!」

ブラストにもそう言われ、火花の円から飛び退こうとするも、踏み込んだ地面が消えてしまい、俺たちはその穴に吸い込まれてしまった。
その後、少しの間落下を続けていたが、再び火花が散って穴が開き、どこかに落とされた。
着地すると、そこは大きな屋敷の中らしい事が分かった。
「いてて……ここはどこだ？」
『わからねぇ。だが、そこにいる奴は知ってるかもな』
ブラストが顎で指す先にいたのは、まるでゲームなどに出てくる魔法使いのような格好をした男だった。
「ようこそ、私のサンクタムへ。歓迎しよう、そこに掛けるといい」
男は椅子を指さして言った。
さっきまでその場所には椅子なんて無かったはずなのに…
俺は警戒しながらも、男の向かいの席に座る。
「私はドクター・スティーブン・ストレンジ。〝至高の魔術師〟を受け継ぐ、最強の魔術師だ」
「後半は何言ってるか分からなかったが、俺は今宮　亘だ」
魔術師風の男――ストレンジ…さんはそれを聞くと、

「今宮　亘か。ふむ、ではもう1人のお友達はなんて言うんだ？」
っ…!!
まさかこの人もシンビオートを…!?
シンビオートと共生している事を知っているような口ぶりに驚愕しながらも、意識を集中させてブラストに聞く。
（どうする？バレてると思うか？）
『ああ、多分バレてるだろう。じゃなきゃ俺たちをここに無理矢理連れてこない』
（不味いな…）
『とりあえず殴っとくか？』
野蛮な提案をしてきたが、とりあえず保留にして話を続けることにした。
「なんのことか分からないんだが？」
「とぼけなくてもいい。私は世界の脅威となる存在について調べているんだ。そして、そのシンビオートとやらの事ももちろん知っている」
そこで一旦区切り俺を見つめてくる。ブラストは渋々俺の首から顔を出す。
『はぁ…ほら、満足か？』
「いいや、まだ私の話が終わってない。続けるぞ」
そう言って再び語りだした。

「最初はすぐに呼び出そうと思っていたんだ。しかし、君は日本で事件を解決した…それを見て、私は君を放っておいてもいいと結論づけた。……だが、わざわざニューヨークに来たなら話は別だ。少し話をしよう」

買い物も無事終わったようだしな。いいネックレスだった、と付け加えて言ってきた。

どうやら今の今まで監視されてたみたいだ。この人には嘘をついても無駄だと思い、大人しく話を聞く事にした。

「君に聞きたいことは山ほどあるんだが、まずはそのシンビオートについて話そう。君の知る範囲でいいから教えてくれ」

俺は知っている限りのことを話した。

ブラストと出会った事、日本での出来事など……

全てを話し終えた後、ストレンジさんはこう言った。

「なるほど。では、善良な市民を襲う心配はないんだな?」

「ああ、俺も、俺の知り合いもそんな事はしない」

そう答えると少しホッといたが、逆に俺が今度は質問する。

「ナナセ達には本当に接触してないんだよな?」

『もしナナセに何かしてたら、お前を爆破して、人間消失マジックをしてやるからな』

と過激な発言をするブラストを咎めながらも、ナナセが心配だったのでそう聞く。
「大丈夫だ。さっきも言ったが、元々関わるつもりはなかった。君が近くに来ていたから呼んだだけだ。……あとその怪物をしっかり躾けておけよ。次そんな口をきいたら、その怪物を君ごとエベレストの山頂に放置するからな」
と割と洒落にならない事を言われたが、ナナセが無事なようで安心した。
ブラストが中指を立てようとしているのを止めながら、ウォンさんというスキンヘッドの男性も交えて他愛のない話を続けていた。

だが、突如轟音が響いて、屋敷の屋根を突き破りながら謎の光と共に人のようなものが落ちてきた。
警戒しながらも急いで落下地点に行く2人に、俺達も着いていく。
落下した時に空いたと思われる穴を覗くと、やつれた顔をした男性がそこにはいた。
そして
「――――サノスが来る……！」
と切羽詰まった表情で言い放った。

その言葉を聞き、ストレンジさんとウォンさんは顔を見合わせる。
「サ、サノ……なんだって？」
『なんだコイツ、屋根を突き破っての第一声がそれか？』
「サノス!!インフィニティ・ストーンを狙ってる宇宙人だ！あいつをどうにかして止めないと！宇宙が大変な事になるぞ！」
ストレンジさんが聞き慣れない名前について尋ねた所、その男は発狂したかのように掴みかかって叫んだ。
そんな中ウォンさんは、なんとかストーンの名前にピクリと眉を動かした。
「インフィニティ・ストーンだと？どこでその事を知った？君は何者なんだ？」
「バナー！ブルース・バナーだ！ええっと、ハルクって言った方が分かるかな？ストーンの事は……っ、ソーから聞いたんだ」
「ハルク……ソー…？もしかしてアベンジャーズのか？」
ハルクにソー。アベンジャーズの主力にして現在行方不明となっているメンバーのはずだ。
その片方が空から降ってきて、サノスという宇宙人がインフィニティなんとかを狙っているときた。
普通なら信じないだろう。しかしここにいるのは地球を侵略者から守っているらし

い魔術師二人である。すぐに冷静になり、対応する。
「誰に連絡をとればいい？」
「アベンジャーズ全員にだ。まずはキャプテンへ！」

「なあ、ブラスト。俺、全然ついていけないんだけど…」
『ああ、でもなんだかヤバいことになりそうだ』

来訪者

バナーさんの話を詳しく聞き、とても危険な状況らしいことはわかったが、キャプテン・アメリカがどこにいるのか分からず、連絡手段も俺たちには無い。
そこでとりあえず居場所が分かっている、
〝アイアンマン〟ことトニー・スタークさんの元へ行く事になった。
ストレンジさんがスリングリングという物を使い、
再び火花の円――ゲートウェイというらしい――を創り出す。
それを覗き込むと、スタークさんらしき人物と綺麗な女性がいた。
ストレンジさんが早速声をかける。
「トニー・スターク。ドクター・スティーブン・ストレンジだ。一緒に来てもらおう。ああ…それと、結婚おめでとう」
いきなり現れたストレンジさんにスタークさんと女性は驚き、訝しげに
「なんだ?お祝いの余興か?」
と警戒しながらもジョークを飛ばしてきたが、ストレンジさんは真剣な眼差しで

「力を貸してほしい……大袈裟じゃなく、宇宙の命運が我々にかかっている」
「我々って？」

「…やあ、トニー……ペッパーも…」
「ブルース…？……大丈夫か？」
ゲートからバナーさんがおぼつかない足取りで向かっていく。
バナーさんは信頼できる仲間と再会できた事と、ここにくる前に起きた悲劇が再び思い起こされたようでふらついてしまい、スタークさんに支えられていた。
スタークさんもその様子から事態の深刻さを感じとったようで、女性に心配されながらもサンクタムへと来てくれた。
全員が広間に集まり、まずはウォンさんがインフィニティ・ストーンらしきものを魔術で空中に投影し、説明を始めた。
「ビックバンと共に6つの結晶が生まれた。それが宇宙を駆け回っていた。…これがインフィニティ・ストーンだ」
「スペース、リアリティ、パワー、ソウル、マインド。……そしてこれがタイム」
ストレンジさんが説明を引き継ぎ、自身の首から下げていたペンダントのようなものを魔術で開く。中には緑に輝く神秘的な石があった。

『へぇ、それがタイムストーンか。話には聞いたことがあるが、実物は初めて見たな』
「なんだよ、知ってたのか？」
『ああ、と言っても名前だけだ。そっちの魔術師の方が詳しく知ってるだろ』
ブラストはインフィニティストーンの事を少しは知っていたようでそう呟いた。それでも知ってたなら教えてくれよ…とブラストを睨んでいると、スタークさんが
「なあ、そこの腹話術くんはなんなんだ？」
と俺たちの方を見ながら言ってきた。
『あぁん？なんだぁ？』
「いや、俺たちは別に腹話術をしてるわけじゃないんだが…」
スタークさんは俺たちを訝しげに見つめていたので、ストレンジさんが助け舟？を出してくれた。
「彼も協力者だ。自己紹介でもしておくか？」
『おい、何勝手に決めてんだ』
ブラストがストレンジさんを睨みつけるが、もちろん手伝ってくれるだろう？と俺たちを試すように言ってきた。
もちろん手は貸そうと思ってはいたが、勝手に決められると、それはそれで……と思いながらもバナーさんも含め、軽く自己紹介を交わし、話題はストレンジさんのストー

ンに移り変わる。
「おい、ドクター。その石を壊すつもりはないのか?」
「ダメだ。タイム・ストーンは必ず守らなくてはならない。…それより、早くキャプテン・アメリカに連絡したらどうだ?」
「こっちにも色々あるんだ。アベンジャーズも解散したしな……だから、余計な口を挟まないでくれ」
どちらもプライドが高いようで一切譲らなかった。
状況も状況なので一歩も引かず、言い合いに発展しそうな空気だったが、バナーさんが何かを思い出したように言う。
「そうだ……トニー!ヴィジョンは?彼の額にはマインド・ストーンが埋まってる。彼も狙われるに違いない」
「……ヴィジョンはワンダと一緒にアベンジャーズを脱退した。今じゃどこで何をしてるのかも分からない状態なんだ」
「なら尚更、キャプテン・アメリカに連絡をするべきだ」
ヴィジョンと呼ばれる人もストーンを持っているらしいが、連絡がつかない。
それを聞いたストレンジさんはまた、スタークさんの持っている古い携帯のようなものを指さしてそう促した。

「だが……」
　それでも渋い顔をするスタークさんにバナーさんが打ち明ける。
「トニー……ソーが、死んだんだ」
「っ……なんだと?」
「ハルクの意識がまだあったからハッキリと見えた訳じゃない。でもソーのあの状態じゃ生きてるのは絶望的だ。サノスは今までのように勝てる相手じゃないんだ」
　バナーさんから伝えられた仲間の死。それが確実でないにせよ、スタークさんは決心したようだった。
　携帯を開き、一つだけ入っている『スティーブ・ロジャース』の名前をすぐ押そうとするが……一歩手前で指は止まってしまった。
「っ…!!」
　ボタンを押そうとする指が震え、いろんな葛藤で再び迷い始めてしまったが、
　俺の相棒は容赦しなかった。

『早く押せよ』
　ポチッ

「なっ、おい!?なにしてっ!?」
「ブラスト…お前マジか…」
俺の身体から触手を伸ばしたブラストは空気を読まずにボタンを押す。
スタークさんは勝手なことをしたブラストにキレそうになっていたが呼出音がすぐに止み、慌てて耳にそれをあてた。
『…スタークか?』
「キャプテン……」
それっきり会話が進まず、お互い沈黙してしまった。それを見かねたブラストが呟き、
『ずっとこうしてるつもりか?愛の言葉を囁く時みたいな間の開き方だな』
「…それって俺とナナセのことか?」
「こんな事をしてる場合じゃないんだ!トニー!」
バナーさんも埒が開かないと思ったらしく、スタークさんに呼びかける。
俺は後でブラストをシメようと心に決め、電話の行方を見守る。
『今の声……もしかしてバナーか?』

その声を聞いたバナーさんはすぐに携帯を奪い取り、電話の向こうに語りかける。
「ああ、久しぶりで悪いんだけど、よく聞いてくれ！インフィニティ・ストーンを狙ってる奴がいるんだ、そいつの名前はサノス！」
『サノス…？』
「そうなんだ、ソイツらが今から地球に来る！だからヴィジョンを守ってくれ！」
バナーさんが矢継ぎ早にキャプテン・アメリカと思われる人物に、要点だけを話していく。
『すまない…ちょっと状況がまだ読めないんだが…』
「詳しいことは後で話す!!だけど、今はとにかくヴィジョンを…」
『…分かった。バナー、僕達は仲間だ。仲間の言ってる事なら信じる。ヴィジョンを守ればいいんだな？』
「ああ…ありがとうスティーブ…」
『いいんだ。…スタークに変わってくれるか？』
それを聞いたバナーさんは急いで携帯を返す。
スタークさんはそれをゆっくりと、まだどこか悩んでいるような表情で、そっと耳にあてた。
「…キャプテン、変わったぞ…」

『……スターク、あんな事はあったが、君も大切な仲間だ……少なくとも僕はそう思ってる』
「……ボクは…正直、まだ気持ちの整理がついていない。当然だろ?…でも…なんというか…ボクも君達の事は…」
スタークさんが音葉を紡ごうとした時――――外から爆発音が聞こえた。

すぐに外に出て、音の鳴り響く方へと向かう。そこには謎のリングが浮いており、大柄な怪物と痩せ細ったミイラのような奴がいた。
どちらも人間のようには見えない。
するとミイラの方がこちらに気づいて、宣教師のように語りかけてくる。
「聞け。そして喜べ…お前たちはサノスの子によって死を迎えるのだ。感謝するがいい。お前たちの意味のない命に…」
グダグダと喋り続けるミイラ野郎に嫌気がさしたのか、気持ちを切り替えたスタークさんがかぶせて、
「悪いけど地球はもう店じまいなんだ。ささっと荷物をまとめて帰るんだな!」

と言い放ったが気にした様子はなく、ストレンジさんの方を見て口を開く。
「ストーンを持つものよ。そのうるさい動物はお前の代弁者か？」
「いいや、まさか。私は自分で語る。お前は不法侵入している、この星にな」
そう言いながら、腕に魔法陣を浮かべて、ウォンさんと共に戦闘体制をとる。
「さっさと失せろ、イカ野郎！」
『最高だな、あいつにぴったりだ！』
「確かにイカ野郎はいいセンスだな」
スタークさんのヤジをブラストと褒め称えていると、イカ野郎は、うんざりだ…、と呟いて、隣の怪物をこちらにけしかけようとしてきた。それを見たスタークさんはすかさずバナーさんに話しかける。
「バナー、やるか？」
「いや…でもやらなきゃならないんだろ？」
そう言って全身に力を入れはじめた。
おそらくハルクになろうとしていたのだが、なかなか上手くいかない。
「あれ…？なんでだよ!?ハルク!!おい！」
それを見かねたブラストが
『なんだぁ？手助けしてやろうか？』

と言うや否や、バナーさんに自分の身体を流し込みはじめた。
いきなりの行動に驚き、すぐにやめさせたが、バナーさんの様子が明らかに変わっていった。
「ウォォォ……ハルクは……弱虫じゃ…ない!!!」
なんと筋肉がどんどん膨れ上がっていき、耐えきれなくなった服が破れ、体を緑色の巨体へと変化させていく。
「おい…なにしたんだよ?急に変身したし、心なしかこっち睨んでないか?」
『ちょっとアイツの身体に入って、〝オハナシ〟しただけだ』
ブラストのせいでこっちを鋭い目で見てくるバナーさ……ハルクに内心ビクビクしていたが、スタークさんが仕切り直す。
「よく分からないが、腹話術くんのおかげで変身できたんだな?よし、じゃあボクも〝変身〟するとしよう」
そう言って胸についていた機械的な物をタッチした。すると彼の体が段々とアーマーに覆われていき、所謂アイアンマンの姿になった。
そして、走ってくる怪物に向けて背中からビットのような物を展開し、高出力のビームをお見舞いする。
怪物は吹き飛ばされはしたが、致命傷には至ってないようだ。

『おいおい、効いてなさそうだぞ?』
「うるさいぞ、腹話術くん。そんなに言うなら君がやって見せろ…っと!」
「ウオォォ!?」
「まったく騒がしい奴らだ」
イカ野郎がそう言うと地面から柱のようなものが生え、俺たちを襲う。なんとか回避できたが、スタークさんは上空へ、ハルクは建物の窓を突き破って姿を消してしまう。
『じゃあ、そろそろ俺たちもやるかぁ』
「ああ、頼むぞブラスト」
俺もブラストに身体を預けて、身体にシンビオートを纏ってファイティングポーズをとる。
体細胞を飛ばし、イカ野郎を爆破しようとするも、魔術のようなもので瓦礫を操ってガードされた。そして、今度は別の瓦礫をストレンジさん達に向かって飛ばしてくる。
「むっ」
「私に任せろ!」
ウォンさんがすぐに大きな魔法円を展開し、盾のように瓦礫を防いだ。そして攻撃が収まると、ストレンジさんが何重もの魔法円を展開して防御から攻撃へと転じようとする。

しかしそれを囮に見せるかのように、戻ってきたスタークさんが両手から衝撃波を撃って車をヤツへと吹き飛ばしたのであった。
「いい手だが、私には通じない」
向かってくる車をイカ野郎は闇魔術により生み出した刃で切断し、真っ二つとなった車体を返すように飛ばした。
片方はスタークさんの攻撃により破壊し、もう片方は俺たちが殴って壊した。
『見た目が変わったが…さっきの腹話術くんだよな？やるじゃないか！』
『よく分かってるじゃねぇか。見直したぜアンタのこと』
『そりゃ良かった、もっと褒めてもいいんだぞ。それと…おい、ドクター！そのストーンどっかにやってくれ！』
「悪いが手離す気はない」
『だよなっ、じゃあな！』
ストーンを狙っている以上、そのストーンをどうにかすればいいと考えたスタークさんだったが、断られた為にそれを諦めて単身イカ野郎へと向かっていった。
それに対し、ヤツは瓦礫を繋ぎ合わせ、槍のような形状へと変えてスタークさんを狙う。
全て避けられてしまうものの、自身の背後から飛んできたチェーン付きの斧には反応

されずにスタークさんを吹き飛ばす事に成功した。
「お前はアイツらをやれ。任せたぞ」
「グルルゥゥゥ…!!」
建物を貫通していったスタークさんを追い掛けようとする怪物だったが、直後に建物の壁を突き破ってきたハルクの体当たりを受ける羽目となった。そして互いに絡み合いながらスタークさんのいる方へと進んでいく。
『ワオ、あっちはまるで怪獣映画だな』
「そうだな、まあ君も似たようなものだが。では私たちもコイツを倒すとしよう」
魔法陣を展開してそう言ったが、イカ野郎は近くのレンガを操り、先端を針のように尖らせてこちらに飛ばしてきた。
ストレンジさんとウォンさんはすぐにゲートウェイを作成し、逆にアイツへと飛ばし返す。
イカ野郎は魔術を用いて避けたが、頬に少し掠ったようで出血していた。血を拭ったヤツは怒りながら瓦礫を無造作に飛ばしてくる。
それを爆破や魔術で凌いでいると、スタークさんのいる方から、こちらに何かが吹き飛んできた。人のようだったのでキャッチすると、
『おい、なんか飛んでき……あー タイツマンじゃねぇか!!』

「痛てて…どうもありがとう……ってうわ!!顔怖っ！敵!?」
なんと、飛んできた人物はいつぞやの強盗を捕まえていたタイツのヒーローだった。
『大丈夫か?坊主。ソイツは味方だ。敵はこっちのデカブツとそこのイカルドだ』
『そういうことだ。俺たちはブラスト。よろしくなタイツマン』
「まあ、スタークさんが言うなら味方なんだろうけど…えっと、よろしく!後、タイツマンじゃなくて、スパイダーマンだから!!」
そう言って糸を使いながらスタークさんの方へ戻って行った。一連のやり取りを、攻撃を防ぎながら見ていたストレンジさんは、
「ウォン、あの危なっかしい少年の方へ行ってくれ。こっちは私たちでなんとかする」
『そうした方がいい。タイツマンはまだガキっぽいもんな』
と言って、ブラストもそう付け加えた。了承したウォンさんはすぐにスパイダーマンの方へと向かう。するとイカ野郎が笑みを浮かべて言った。
「いいのか?お前たちだけで私を倒せるとは思えないが」
『言うじゃねぇか。おい、魔術師！ストーンを大事に守っとけよ!!』
ブラストがそう言い放ち、俺たちは猛スピードで接近していった。

来訪者②

「まったく……野蛮すぎる」
俺たちが近づこうとするも、イカ野郎は瓦礫や車を操ってこちらに投げつけてくる。
『邪魔だオラァ！』
「いいぞ、その調子だ。大きい瓦礫は私がなんとかする」
（おお、魔術ってすごいな…）
『ワタルも習ってみたらどうだ？』
軽口を叩きながらも向かってくる物を爆破したり、魔術でガードしてもらったりして、なんとか接近していく。
近づいた俺たちは、拳をヤツに向かって振り抜いたが、地面から生えてきた槍のようなものに防御されてしまう。
「クッ、まずはお前からだ！」
追い詰められたイカ野郎はそう叫び、真横にあった建物を瓦礫ごと俺たちにぶつけてきた。あまりの衝撃に踏ん張りが効かず、吹き飛ばされてしまう。

『ぐっ…!!』
「大丈夫か!?今助け…くっ!」
「ストーンを渡せっ!!」
　魔術で助けようとしてくれたが、ヤツが槍のような物を作り、ストレンジさんを狙ってきたため上手くいかなかった。
　そのまま俺たちは広場の方まで飛ばされてしまい、スタークさん達の目の前に転がる。
『あのイカ野郎がぁ…!』
「あれ!?さっきの人!大丈夫!?」
『おい、大丈夫か!…ったく、こっちも手一杯なのにな』
　スパイダーマンとスタークさんが声を上げ、ウォンさんとハルクもこちらをチラリとこちらを見ていたが怪物の相手で精一杯らしく、余裕がないようだった。
『こっちも手こずってるな』
(でも今はイカ野郎の方に行くのが先だ)
　俺たちも手伝いたかったが、1人で戦っているストレンジさんが心配だったので、すぐにさっきの場所へ向かう。
　そこではイカ野郎がストレンジさんを瓦礫に縛り付け、鉄筋で首を締め上げている最

中だった。
「くくっ、ストーンは奪わせてもらうぞ」
タイム・ストーンを取り出そうとヤツはペンダントに掴みかかる。だがそれと同時にペンダントそのものが高熱を帯び始め、驚きと痛みで離してしまったヤツの手は火傷を負っていた。
「残念、だったな……私以外に、このアガモットの目は操れないぞ……?」
「っ……ならば貴様にさせるまでだ!」
ストレンジさんの首をさらに締め上げ、気を失わせたイカ野郎は彼を倒れた地面ごと宙へと浮かべた。
このまま上の宇宙船のような物へと連れていくつもりだろう。
しかし、ストレンジさんの付けているマントがひとりでに動き出し、ズリズリと体に巻き付いている鉄筋の中を動いて最後にはスポッとストレンジさんの体を抜いたのである。
「っ!?なにっ!?」
ストレンジさんは未だ目覚めないものの、マントは主人を安全な場所まで運ぼうと、追いかけてくるイカ野郎から逃げていった。
『なんだか分からねぇが、とりあえず追いかけるか』

（ああ、頼むぞブラスト！）

浮きながら逃げていくマントを追跡するが俺たちの後ろからヤツも追ってきており、ストレンジさんの捕縛と俺たちの妨害を兼ねて魔術を行使してきた。

それを上手く捌きながら進んでいき、再びスタークさん達の前を通る。

『今度はなんだ！ドクターはどうなった!?』

『気絶させられちまって、あいつと絶賛チェイス中だ！』

怪物と戦っていたスタークさんが運ばれていくストレンジさんに気づき、慌てて声をかけてくる。

必死に追いかけながらもブラストがそう答えると、スパイダーマンに指示を出した。

『くっ…坊主！あの魔法使いの鬼ごっこに君も参加しろ！隙があったら助けてやるんだ』

「あの人を助ければいいんだよね？分かったよ、スタークさん！」

そう言ってスパイダーマンも糸を建物にくっつけて、スイングしながら共にストレンジさんを追いかける。

しかし、イカ野郎の魔術に阻まれてなかなか上手くいかない。今にもストレンジさんがマントごと捕まってしまいそうだった。

「どうしよう！このままじゃあの人が危ない！」

『じゃあ、俺たちがアイツの気を引く！だからタイツマンは魔術師を救え！』
「だからスパイダーマンだって!!でも、分かった！任せるよ!!」
スパイダーマンが快く承諾してくれたので、
俺たちはヤツの方を向き、爆破させながら殴りかかる。
『ほら、喰らえ!!』
「やかましいぞ！」
俺たちの爆破は難なく防がれたが、ヤツの意識をこちらに集中させることができた。
その隙にスパイダーマンがストレンジさんに糸をつける。
「よし！掴んだよ！」
『ナイスだ！じゃあさっさと魔術師連れて逃げ……』
ブラストがそう言い切る前にイカ野郎はニヤリと笑い、徐に手を振り上げる。
すると、空に浮いている宇宙船から青白い光が照射され、その光にストレンジさんがスパイダーマンごと吸い込まれていく。
ヤツはそれを見た後すぐに自らも宇宙船へと向かっていった。
逃すまいと、腕を伸ばして掴もうとするも
近くのポールをぶつけられて妨害される。
『クソがッ！待て!!』

（ブラスト！なんとかならないのか!?）
『ダメだ、あの距離は爆破させて飛んだとしても届かねぇ…』
　為す術もなく途方に暮れていると、怪物をどうにかしたらしいスタークさんがこちらに寄ってくる。
『どうした？坊主とドクターはどこだ？』
『悪いな…あのでかいドーナツに吸い込まれちまった』
『なんだと!?クソっ…ウォン、結婚式には招待するよ！』
　そう言って飛び立とうとしていたので、無理矢理アーマーにしがみつく。
『おい、何してる！ボクにそんな趣味はない！』
『俺たちも連れていけ！』
『ダメだ、遅くなる！早く降りろ！』
『じゃあこうすりゃいい』
　ブラストは体をスタークさんのアーマーに入り込ませ、何か勝手な事をしているようだった。
『おい！ボクのスーツに何してる!?』
　スタークさんは困惑しているようだったが急にスピードが上がりはじめ、すぐに宇宙船付近まで辿り着くことができた。

『腹話術くん！どうなってる!?』
『俺の熱エネルギーをアンタのスーツに供給してやったんだ。これで文句ないだろ？』
『…はぁ、分かった。だいぶカッコ悪いが…しっかり捕まってろよ』
スタークさんは渋々了承し、そのまま飛び続ける。
宇宙船まで着くとスパイダーマンがマスクを外した状態で必死にしがみついていた。
スタークさんはそれを見た後何かを呟き、彼に呼びかける。
『おい、パーカー！そこから飛び降りろ！』
『おい正気か？ここから飛び降りたら怪我じゃ済まないだろ』
「そうだよ……そんな事できない、よ……そ、それよりも息がっ……！」
『大丈夫だ、僕に考えがある！いいから早く飛び降りろって！』
とんでもない事を言い出したスタークさんにブラスト達はそう返したが、なにか考えがあるようでスパイダーマンに焦ったように促す。
彼も限界が近かったようで、ほぼ気絶に近い形でその場から飛び降りた。
真っ逆さまにに落ちていく彼だったが、突然背中に何かが衝突する。
その何かは全身に纏まりつき、スーツのような物を形成した。
「いっだ!?……えっ？な、何これ!?」
起き上がるスパイダーマンが驚愕する。スーツが今までの布のようなものから、ス

タークさんと同じような金属製のスーツへと変わっていたのだから。
「ス、スタークさん！すごいよこれ、ピカピカの新車みたい！」
『よし、Ｆ．Ｒ．Ｉ．Ｄ．Ａ．Ｙ．。坊主を地上に返してやってくれ』
「……え？ちょっとスタークさん！まっ――――」
　スタークさんからの指示に彼は困惑し、このままストレンジさんの救出に一緒に向かおうと言い出す前に、開いたパラシュートに体を引っ張られてしまった。
「うわぁぁあっ!?」
『良かったのか？』
『ああ、坊主には危険すぎるからな。君たちだって降りてもいいんだぞ？』
『冗談言うなよ、勝負はこれからだろ、なぁワタル』
「ああ。ここまで来たしな、最後まで付き合うよ」
　宇宙船の横を回りながら過ぎ去っていくスパイダーマンを見ながら、ブラストはそう聞いたがスタークさんは彼を巻き込む気はないようだ。俺もブラストの中から口だけを出してそういった。
　スタークさんの彼への態度に、まるで保護者だな、とも思ったが口には出さなかった。

一方、怪物をゲートウェイで北極へと退け、飛び去ったスタークを見つめていたウォンはようやく戦闘体制を解いた。
ハルクは怪物相手に暴れる事ができて多少満足したのか、大人しくバナーへと戻る。
破れてしまった服の代わりに新しい物を店から調達してきたバナーは、外で待っていたウォンと合流する。
「えっと……君はこれからどうするんだ?」
「私はストレンジが不在の間、留守を預かる必要がある。それと、これは君に渡しておこう」
そう言ってウォンが差し出してきたのはスタークが持っていた古い携帯電話。どうやらいつの間にか落としてしまっていたらしく、バナーがそれを受けるとウォンはゲートウェイの中へと消えていった。
バナーは携帯を開き、登録されている
『スティーブ・ロジャース』の名前を選択し、再び連絡をとった。

時は少し進み、スコットランドでは、
元アベンジャーズであるスカーレット・ウィッチことワンダと、ヴィジョンが身を隠し、ひっそりと生活を送っていた。
しかし、ヴィジョンの額に埋め込まれたマインド・ストーンを狙うサノスの部下の襲撃を受け、ヴィジョンは負傷、ワンダも危険な状況に陥ってしまう。
そこへバナーから連絡を受けたキャプテン・アメリカが現れ、ファルコンとブラック・ウィドウと共に、２人を救出。
なんとかヴィジョンとワンダの救出及び、マインド・ストーンの奪取を防いだスティーブ達はバナーと会うためにもアベンジャーズ本部へ向かう。
だが、その途中にファルコンことサム・ウィルソンが口を開く。
「なあ、キャプテン。少し寄り道していいか？」
「寄り道？どこへ行く気なんだ？バナーを待たせてるんだが」
「これからデカい戦いが起きるかも知れないだろ？ちょっと助っ人を呼ぼうと思ってな」
スティーブはアントマンであるスコット・ラングの事かと思い、彼の家庭のことを危惧して断るように言ったのだが、どうやらスコットではないらしい。

では一体誰なのか、そんな事を考えていると目的地に着く。
目の前にはガタイのいいの男性が立っており、降りてきたサムを見て嫌そうな顔をしていた。
「ああ、何度も言うが…俺は、俺たちはアベンジャーズには入らない。だから帰ってくれ」
サムの顔を見るなり男はぶっきらぼうにそう言った。どうやらサムは何度もこの男にスカウトをしていたらしい。
「今回は違うんだ。いや、違くないかもしれないが。とにかく力を貸してくれないか?」
サムがそう頼み込むが男は無言で首を横に振るだけだ。痺れを切らしたサムが、
「お前たちの情報をバラさないでやってるのは誰だ?俺たちみたいに追われる身になりたいか?」
と告げると、男はブツブツと何かを言った後渋々了承した。
「はぁ…分かった。ただ今回だけだぞ?……ヴェノム、お前もそんなに喜ぶな…」
「なぁ、サム。彼が助っ人なのか?」
「ああ、きっと頼りになる。ブロック!みんなには見せても構わないぞ」
鍛えてはいるようだが自分たちのように戦えるのか?そういった意味も交えてスティーブはそう聞く。

サムは男に何かを見せるように呼びかけると、男の体から黒い何かが出てきた。
『よぉ、アンタがキャプテン・アメリカか？思ったより普通なんだな』
「なんだ…？彼の身体から何かでてるぞ…？」
訝しげに問うと、男とその〝何か〟はこう言った。
「俺はエデ『俺たちはヴェノムだ』
「「……」」
『おい、エディ！今のは俺に合わせて、バシッと決めるべきだろ！』
「悪い、普通に自己紹介するのかと思ったんだ」
なんとも締まらない感じで、エディ・ブロックとヴェノムが合流することとなった。

来訪者③

「久しぶりだな、ここに帰ってくるのも」
「ああ、そうだな」
ヴィジョンとワンダ、そしてエディとヴェノムを連れ、クインジェットで基地へと辿り着いたスティーブ達。ソコヴィア協定による影響か、基地に滞在している職員はほとんどおらず、何事もなく廊下を進んでいく。エディ達は物珍しそうにあたりを見渡していた。
そしてローディが待っている部屋へと入ると――――
『キャプテン！よく戻ってくる事が出来たな……！』
ローディは勿論いたが、空中に浮かぶディスプレイには協定を推し薦め、スティーブ達を嫌って国際指名手配犯に指名したロス長官の顔が映し出されていた。
『ダルそうなヤツだな』

「ああ、それには同感だ」
『黙れっ！なんなんだお前達は!?とにかく！ローズ、早くこいつらを捕らえろ！』
「ええ、任せてください長官」
　ローディはそう言うと、即座にディスプレイの電源を切り落とした。これでうるさい奴がいなくなってくれた。
「悪いな、なかなか話が終わらなくて……いや、それよりも久し振りだなみんな！会えて嬉しいよ…知らない顔もいるが」
「ああ、彼は助っ人なんだ。きっと力になる」
　ローディとサムが手を握って再会を祝い合う。だが、状況も状況なためスティーブが本題に入ろうと声をかける。
「ローディ、バナーは着いてるか？」
「……こっちだよ、スティーブ。みんな、心配かけてごめん。でもこうしてまた会えて良かったよ」
　奥のドアから顔を覗かせ、現れたバナーはスティーブ達との再会を喜んではいるものの、初めはどこか元気がなかった。
　自分と因縁のあるロスがいつの間にかアメリカ国務長官なんて立場になっており、ソコヴィア協定の事もあって今後もその立場を利用して何をしてくるのか不安なのだ。

「あっ……ナ、ナターシャも……その、会えて嬉しいよ」
「え、ええ。私も嬉しいわ、ブルース」
「髪、金色に染めたんだ。すごい似合ってる」
「ありがとう。ちょっと色々あってね」
「気まずいな…」
ナターシャとバナーは以前までいい雰囲気ではあったが複雑な別れ方をしたため、ギクシャクしていた。
「バナー、大体は話で聞いたがもう一度話してくれないか？事情を知らないメンバーもいるんだ」
「ああ……勿論だ。じゃあ、まずはウルトロンとの戦いの後、僕がどうしてたかだけど――――――」

バナーはこれまでの事を話した。
二年間もハルクのままで、サカールという星の闘技場でチャンピオンとして君臨していたかと思いきや、そこで偶然再会したソーと一緒にアスガルドをソーの姉であるヘラから守る為に戦う……。
結局はスルトと呼ばれる化け物のせいでアスガルドはヘラもろとも崩壊してしまっ

たが、残ったソーやバナー、その他の仲間やアスガルド人は地球を目指して旅立った。
そこでサノスが現れて――――――
「ソーがやられた……？」
「ソーが死んだかは分からない。でもサノスに手も足も出ずに負けたのは事実だ」
ヘラのせいでムジョルニアを失っていたとはいえ、ソーが敵に完敗した……その事実に他のメンバーはひどくショックを受けていた。しかし、いつまでもそうしている訳にもいかず、地球の戦力なども踏まえて現在の状況を整理していく。画面にはヒーロー達の顔と名前が浮かび上がった。
「サノスの脅威は分かった。ところでストーンの所在が分かってるのはサノスが持つパワー、スペース。ヴィジョンが持つマインド。そして――――」
「スタークとパーカーとワタルという日本人、それとストレンジっていう魔術師が持ってるタイム・ストーンか」
「アリ男もいるのに、クモ男までいるのか…」
「待て、今ワタルって言ったか？」
「知り合いか？」
「ああ、似たような境遇なんだ」
『あいつらもこの祭りに参加してるとはな』

話に入れず、静かにしていたエディが聞き覚えのある名前に反応する。
ワタルと顔見知りである事を明かし、軽く説明をした。
バナーはエディから出てきたヴェノムを見て、確かに同じようなものが彼にも憑いていたなぁ、と納得していた。
「残りのリアリティとソウルに関しては誰も知らないか……」
「でもとりあえず、ヴィジョンだけでも守る事が出来れば絶対にストーン全部は集まらない。そうでしょ?」
「そうだな、ヴィジョンを守る事に集中すればいいからな」
「ああ、いいんじゃないか?」
ナターシャの提案にローディやサム、その他のメンバーも賛成する。だが当の本人であるヴィジョンは暗い表情であった。
「どうしたの、ヴィジョン?」
「……それよりも私ごとストーンを破壊する方が確実だと思われます」
「なっ……!?」
ヴィジョンの言葉にみんなが驚く。
スティーブ、ナターシャもその方法は考えてはいた。だが仲間であるヴィジョンを失うわけにはいかないと、口に出さなかったのだ。

「ヴィジョン……お前、犠牲になる気か？」
「私を守ろうとすれば間違いなく多くの犠牲者が出ます。あのブラック・オーダーという敵は決して侮れません。それに……」
　ヴィジョンがサノスの手先に刺された腹に手を置く。同じストーンの力を持つワンダに治してもらったみたいだが、完全に元通りになったわけじゃなく少し調子が悪いらしい。
「駄目よ、ヴィジョン！そんな事、絶対に駄目よ！」
「……もしも私ごとストーンを破壊するならワンダが適任でしょう。私と同じストーンの力を持っていますから可能な筈です」
「……ヴィジョン！お願いだからその話をやめて!!」
　ワンダの能力が無意識に少し発動したらしく、周囲の植木や棚が浮かび、倒れていった。その事でワンダは一気に冷静になり、わたわたと困惑し始めた。
「ご、ごめんなさい、私……！」
「落ち着いて、ワンダ。大丈夫だから」
『なんだ今のは!?』
「おいおい、今勝手に物が動かなかったか？」

申し訳なさそうに謝るワンダにナターシャが宥め始める。
ワンダの念動力のようなものを初めて見るヴェノムとエディはとても驚いていた。
「とにかく、ヴィジョンを破壊するというのは他に手段がなくなった時の最後の方法だ。バナー、ストーンをヴィジョンから外す事は出来ないのか？」
「……ストーンをヴィジョンから無理やり外せば、ストーンから力を供給してる彼は完全に機能停止する。でも掛かってる鍵を一つずつ外していけば……可能かもしれない」
スティーブがヴィジョンを軽く咎めた後、他の方法がないのか、バナーに聞く。
すると、バナーの返答にヴィジョンとワンダが振り向き、みんながバナーを見る。
全員から視線を向けられてるバナーはあまりの期待の大きさに耐えきれなかったのか、手を振って慌て出した。
「あ、あくまで可能性の話だ！でもヴィジョンはＪ．Ａ．Ｒ．Ｖ．Ｉ．Ｓ．、ウルトロン、トニー、僕、色々なものが混ざり合って生み出された。だからストーンが欠けても、他の要素が補い合って、そこにストーンとは別のエネルギーを供給できれば……」
「それはここで出来るの？」
「いや……ここの技術じゃ難しいかもしれない。それに鍵は僕とスタークで掛けたんだ。だから僕ともう一人、スタークと同じ位の科学者がいれば……」
スタークやバナーレベルの科学者はそうそう見つからない。全員で頭を悩ませなが

ら思考しているとエディが口を開いた。
「なぁ、優秀な科学者がいるかは分からないんだが、最近開国したあそこなら最新技術がそろってるんじゃないか？」
「ワカンダのことか？」
「そうだな、ワカンダならいけるかもしれない。それにあそこには彼もいる…」
希望が見えてきた面々はそれに賛同し、ヴィジョンのストーンを外すため、ワカンダへ向かうこととなった。
『良かったなエディ。天下のアベンジャーズ様に意見が通ったぞ』
「まあ、切羽詰まった状況らしいからな。なんとか良い案が出せて良かったよ」
それにワカンダは一度行ってみたかったんだ、とエディは溢した。

場所は変わり、宇宙船内。

俺たちは今スタークさんと共に、ストレンジさんを拉致したヤツの宇宙船の中にいた。

俺は狭い通路を歩けるように一旦身体を元に戻す。しかし、ブラストの顔はしっかり出ており、背後を警戒してくれている。

スタークさんは公園で共にいた綺麗な女性、ペッパーさんと連絡をした時からスーツのマスク部分を外しており、小さな声で喋る。

「ここからじゃあ、まだドクターが見えないな。もう少し近づこう」

俺たちも無言で頷き、ストレンジさんとイカ野郎がいる場所の少し上のエリアに来た。

そこから様子を見ると、ストレンジさんはイカ野郎に拷問されているようだった。

顔に無数の針のようなものを刺されそうになっており、タイムストーンを力づくで奪えないと分かったヤツは彼に苦痛を与えて、自らストーンを渡すまでそれを続けるつもりなのだろう。

すぐに助けようと、ここから飛び降りようとしたその時。

突然スタークさんの肩を何かが叩いた。

咄嗟に振り向き、スタークさんはリパルサーを俺たちは触手を向けたが、そこにいたのはストレンジさんのマントだった。

意思があるようで、両手を上げているようなポーズをとる。

俺たちが構えるのをやめると、マントも両手?を下ろした。

「これはまたご主人に忠実だな」
「すごいなこのマント」
俺とスタークさんが呆れと関心が混じったような声をあげていると、目の前に何かが降りてきた。
再び俺たちが構えようとすると、
「ま、待った。僕だよ!だから撃たないで!」
そこにいたのは新しいスーツに身を包んだスパイダーマンだった。
こちらに気づいた時にマスクを外したようで素顔が見えている。
どこかで見たような気がするが気のせいだろう。
それよりもあまりの若さに驚き、この若さならスタークさんが心配するのも当然だなと思っていると、
「ピーター!?なんでここにいる?F．R．I．D．A．Y．に頼んで家まで帰したはずだが」
「違うんだよ、僕はあの人を追ってただけで……というかあなたのせいでここにいるっていうか…」
「今なんて言った?」
「あ、いや、やっぱ取り消す。とにかく、ここは宇宙なんだよね…」

スタークさんはそう言ったがスパイダーマンは華麗に受け流す。そのまま話を続けようとする彼にスタークさんは咎めるように言う。
「片道切符なんだぞ。訊いてるのか?考えたようなふりをするな」
「考えたよ!でも、〝親愛なる隣人〟でいたくて。変なこと言ってるの分かってるけど、言いたいこと分かるよね?」
少しキツく言われたがスパイダーマンも彼なりの言葉で自分の考えを紡ぐ。
それを聞いたスタークさんはまだ不満はあるようだったが、とりあえずは納得したようだ。そろそろ本題に戻りたいため口を挟む。
「よし、そろそろストレンジさんを助けたいんだが、いいか?」
「ああ、そうだな。囚われの魔術師を助けるとしよう」
「そうだね…でも、ごめん。また話変えちゃうかもしれないんだけど、気になったからいうね。あなたって僕とどこかで会った事あるよね?」
「え?」
スパイダーマンが突然そんなことを言ってきた。
「いや、やっぱり勘違いかも…その赤い生き物?がついてる知り合いは僕にはいないし」
ブラストを見ながら彼はそう言う。しかし、ブラストは覚えていたようで、
『いや、会ったことがあるぞ。お前、俺たちが行った高校の生徒だろ?ほら、廊下に突っ

立ってた時に話しかけてきた』
　それを聞いた彼も思い出したようで、
「ああ！あの時の迷子の人!!」
「だから、迷子じゃないって」
　そのやり取りで俺もようやく思い出すことができた。まさかあの時の彼がスパイダーマンだったなんて…。
「あらためて、俺は今宮　亘だ。ワタルでいい。よろしくな」
『俺はブラストだ』
「僕はピーター・パーカー。ピーターでいいよ」
　自己紹介も踏まえてそんな事をしていると、
「なんだ、知り合いだったのか？だが話は後だ。ストレンジを見てみろ。やばい状況にある。さあ、どうする？」
　スタークさんが仕切り直すように声をかけ、作戦を練る。
「そうだね、えっと、よし。すごい昔の映画だけど、〝エイリアン〟って見たことある？」
　ピーターがそう言ってきた。
　なるほど中々いい案だ。
　しかし、エイリアンはそれほど昔の映画だろうか…？そんな事を思いながらも細かい

計画を立てていく。

「うぁぁぁ!?うぅぅ…」
「どうだ?苦しいだろう。ストーンを渡す気になったか?」
ヤツはストレンジさんの顔に針を突き刺し、拷問を続けていた。彼はあまりの苦痛に呻き声を漏らす。
だが、そこにスタークさんが飛び降り、イカ野郎の背後に立った。
「ほぉ、仲間を助けに来たのか?」
『そいつは仲間じゃない。プロとして助けない訳にいかないだけだ』
そう言ったスタークさんはリパルサーを奴に向ける。
それに気を取られたヤツは俺たちの行動に気がつかなかった。
ブラストに身体を預けた俺は宇宙船の壁を爆破し、穴を開ける。
「あああぁぁぁ!?」
船内と宇宙とを隔てる壁がなくなったため、宇宙船の空気が宇宙空間に勢い良く出ていく。その勢いに流されたヤツは突然の事に何も出来ず、そのまま宇宙へと投げ出され

ていった。恐らくもう助からないだろう。
当然、拘束されていたストレンジさんも身動きが取れず、吸い込まれそうになる。彼のマントが必死に引っ張ろうとするも、あまりの勢いにそのまま飛ばされてしまった。そこでピーターが彼に糸を付け、流されないように目一杯踏ん張る。
それでも徐々に流され始めてしまうが、彼の背中から蜘蛛の足のようなものが伸び、しっかりと身体を支えた。
『いいぞ、そのまま!』
スタークさんが空いた穴をスーツの機能を用いて塞いでいく。
俺たちも引っ張るのを手伝い、なんとかストレンジさんを船内に留める事ができた。
宇宙船の中には他に敵もいないようで少しホッとしていると、スタークさんがストレンジさんに語りかける。
「何か言う事はないのか?礼でも言ったらどうだ?ほら」
「なんの礼だ?私を宇宙に飛ばしかけた事への?」
「誰が助けてやったと思ってる!?」
『おいおい、やっとひと段落ついたのにもう喧嘩か?』
俺は2人と話したのは少しだけだが、それだけでもプライドがとても高い事が分かった。そんな2人がいがみ合うとこんなにうるさいのか…と呆れながら眺めていると

ピーターが気まずそうに
「あの、僕達もいるんだけど…」
「そっちの腹話術コンビはまだいいが、君は密航者だ。子供は黙っていろ」
そう言ったがスタークさんもストレンジさんとの口論で頭に血が昇っているらしく、ピシャリと彼に言った。
それを見たストレンジさんは困惑したように続ける。
「すまない、私は彼の事がよく分からないんだが？」
「ああ、自己紹介がまだだったよね。僕はピーター・パーカー」
「…ドクター・ストレンジだ」
「あ、そっち？それじゃあ、僕はスパイダーマン」
はぁ…とため息をつきながらストレンジさんは話を変え、地球に戻るように提案してきた。
「このデカいドーナツを操って地球に帰れないか？」
『コイツを運転するんだったら俺がやるぞ。多分なんとかなる』
「まじかブラスト。本当にできんのか？」
ブラストが自信ありげにそう言ったので、早速操縦桿のようなところへ行くと、スタークさんに声をかけられる。

「待て、地球には帰らない」
「どういうことだよスタークさん？地球に帰らないって言ったのか？」
「ああ、このままサノスのいる場所に向かう」
突拍子もない発言に驚き、そう聞き返すも彼は平然と答える。すると、ストレンジさんが呆れたように言う。
「分かっているのか？サノスは強敵だ。タイム・ストーンを奪われる訳にはいかないんだぞ？」
「分かってないのは君の方だ、ドクター。サノスの事はもう6年も考え続けた。バナーの話じゃあいつはまだストーンを二つしか手に入れてないと言ってた。なら、他のストーンを集められる前に倒すのがいいはずだろ」
こっちからサノスを倒しに行こう、ドクター。とスタークさんが言うと、ストレンジさんはしばらく悩んだ後こう言った。
「……いいだろう。だが、タイム・ストーンを守るためだったら、私は君と少年、そして彼らの事も容赦なく見捨てる。仕方ないな？」
「ああ、その代わりストーンはしっかり守ってくれよ」
ストレンジさんはストーンを守るためなら俺たちの命を見捨てると言った。
それで地球が助かるなら俺は別に構わないが、ナナセの事が気がかりだな…と胸ポ

ケットに手を当てながら考えているとスタークさんがピーターの方にやってきた。
「パーカー、これからボク達はサノスと戦う。もしかしたら死ぬかもしれない。君にその覚悟はあるか？」
「……うん、あるよ。そいつを倒さなきゃ地球どころか宇宙が危ないんだもんね。僕がスタークさん達の助けになれるか分からないけど……」
「それなら君もアベンジャーズの一人だ。歓迎するよ、ピーター・パーカー」
「っ……はい！」
　スタークさんはピーターを激励するためにも正式にアベンジャーズとして迎え入れたようだった。ピーターの決意に関心しながらそれを眺めていると、こちらの視線に気づいたようで話しかけてきた。
「なんだ？君たちも入りたいのか？」
「いや、俺たちはそんな柄じゃない」
『見せ物になるつもりは毛頭ないからな』
「おい！ブラスト！」
「大丈夫だ、慣れてる。まぁ、入りたいと言われてもこちらから断る気だったが。改めて、君たちもよろしく」
　と言って握手を求めてきた。それに快く応じるが、なぜか力を入れてきており結構痛

かった。やっぱりブラストの発言に怒っていたのだろうか。
その後は宇宙船の自動操縦でサノスが待つ場所へと向かう事になった。
俺は少し前の出来事を振り返る。
宇宙人で悪人だったとはいえ、イカ野郎を殺してしまったという事実に複雑な気持ちになる。だが今考えるべきは地球の命運だな、と気持ちを切り替えてサノス打倒を心に決めるのであった。

合流

宇宙船の自動操縦に任せて進んでいき、ついにサノスが待ち構えているであろう惑星へと到着した。
そこは巨大な雲に覆われており、上空からは地上の様子が見えなかった。
そしてその雲の下へ行こうとした時にある事に気づく。
もうすぐ着陸だというのに宇宙船のスピードが緩まないのだ。
「大丈夫なの？これ？このままじゃ地面に激突しちゃうんじゃない!?」
『任せろ、俺たちがなんとかする』
ピーターが焦ってそう言ったがブラストは冷静にそう答える。そして再び俺の身体に纏わりつき、操縦桿のようなものに手をはめ込む。
「おい、本当に大丈夫なんだろうな？」
『黙って見てろ。こういうモンを操るのは得意なんだ。そこらの旅客機より安全に着陸してやるよ』
ブラストは自分の体を操縦桿から宇宙船全体に侵食させていき、全体に張り巡らせ

る。こうする事で大体のものは操縦できるらしい。
　実際に俺のバイクも乗っ取られ、ブラストに勝手に運転された事があるので身をもって知っていた。
　とにかく、これで墜落の心配はないと思いホッとしていたが、ストレンジさんは無言で魔術を使い、宇宙船にバリアのようなモノを張る。
　しかし、それは意味をなさず、ブラストはしっかりと宇宙船を操って宣言通り安全に着陸させた。
『よし、ほら安全だったろ?な?』
「ああ……そうだな。中々の腕前だった…そこの魔術師は君の腕を信用してなかったみたいだが」
「君だってスーツを着て、盾のようなものを作ってただろう?それも随分と頑丈そうなのを」
　どうやら他の人はブラストの操縦を本気で信用してなかったみたいだ。
　また喧嘩を始めそうな2人をなんとか収めていると、どこかに行っていたピーターが糸でスイングしながらこちらにやってくる。
「よっと、さっきの操縦本当凄かったよ!ちょっと怖かったけど。映画で例えるなら…」
「待て、この先もずっとその調子で映画のネタを挟んでくる気か?やめてくれ」

「じゃあ本題に入るよ。ここに誰か来るみたい」
ピーターのお喋りをスタークさんが咎めると、彼は真面目な顔になりそう言った。
「なんだと……うおっ!?」
スタークさんが聞き返そうとするも、突然俺たちの目の前に何かが転がってきて爆発する。
「ブラスト!」
『ああ!』
ブラストに呼びかけて咄嗟に爆弾を掴み、熱を吸収したが衝撃を抑えることはできず、全員吹き飛ばされる。
俺たちは背中を壁にぶつけて倒れ込んだ。
痛みはあるが動けないほどではない。
急いで立ち上がり周りを見渡すと、爆弾を投げ込んできた下手人と思われるヤツらが突撃してくる。
メカニカルなヘルメットをした奴と灰色の肉体のスキンヘッドな特徴的な男、そして額に生えた触覚や大きな黒目など明らかに地球人ではない女?だ。
『おい、ワタル大丈夫か?』
「ああ、問題ない。それよりなんなんだコイツらは?サノスの手下か?地球人っぽい奴

もいるが」
『分からん。ただ、コイツらの反応が普通じゃないのは分かる。特にヘルメットの奴。やけに殺気立ってるというか、なんというか……』
　コイツらの正体について疑問は湧いたが、まずはこいつらを片付けることが優先だ。
　俺はブラストと交代し、近場にいた灰色の男を掴み上げる。
「ぐっ、離せ赤いの!!なんなんだお前は!?」
『質問するのは俺の方だ。お前たちは誰だ?何故こんなことをする?』
　男は通常の人間よりも力が強く必死に抵抗するが、俺たちの力には敵わない。
　片手で持ち上げたまま問いかけていると、ピーターがヘルメットの男に縄のようなモノを投げられて捕まってしまった。
　そのまま彼を掴み、こめかみに銃を突きつける。
「全員そのまま動くな!戦いはそこまでだ!」
　ピーターを人質にとり、男はこう続けた。
「いいか!一度しか言わないからな!ガモーラはどこだ!?」
「ボクにも言わせてくれ。ガモーラって誰だ?」
「俺も。なんでガモーラなんだ?」
　ヤツの問いにスタークさんと俺たちに掴まれている灰色の男がそう答える。

痺れを切らした男は
「どうしても言わない気か！ならいいお前ら全員殺してやる！」
そう言って人質となったピーターに銃を突きつけるが、
「やってみろ！お前の仲間が吹き飛ぶぞ！さあ、やれよ！」
スタークさんが灰色の男に向かってビーム砲を突きつける。
その状態で撃ったら俺たちも危ないんじゃ…？と思っていると灰色の男が口を開いた。
「やれ！クイル！俺のことは気にするな！」
その言葉を聞いた男が動揺する。
俺はそのやりとりを見て、コイツらが本当にサノスの手下なのか？と疑念を持ち、直接聞いてみる事にした。
「なあ、アンタら誰なんだ？サノスの手下じゃないのか？」
「うぇっ、なんだお前!?って違う！俺たちはサノスの手下なんかじゃない！それはお前達の方だろ！」
ブラストの中から半分だけ顔を出した俺に驚いていたが、男はそう答えた。
「俺たちも違う。サノスを倒しにきたんだ」
「俺達だってそうだ！サノスは敵だ！俺の女を攫って……じゃあ、お前ら誰だ!?」

「僕達アベンジャーズだよ」
『正確には俺たち以外が、な』
　俺の言葉に困惑した男はそう問いかけ、それにピーターとブラストが答える。
　すると触角の生えた女性が反応を示した。
「アベンジャーズって、ソーが言ってた地球を守ってるヒーローチーム!?」
「君達、ソーを知ってるのか?」
「ああ、知ってる。俺達が助けた男の名前だ」
　スタークさんの質問に灰色の肉体を持つ男が答える。互いに〝相手がソーを知っている〟という事実により敵対意識は消え、漂っていた緊迫感も無くなりつつあった。
「えっと……貴方達は?」
「俺達か、坊主?俺達はな、銀河中で活躍してるヒーローチーム、ガーディアンズ・オブ・ギャラクシーさ」
　その後はお互いの事を軽く話し、打倒サノスを掲げる者として協力することになった。とりあえず宇宙船から出て、惑星の大地を踏みしめる。
「この惑星どうなってんだ?軸がズレてるし、重力の渦があちこちにあるぞ」
　ヘルメットの男――スターロードことピーター・クイルが水平器のようなものを持ってそう言った。他のメンバー達もそれぞれ惑星を見渡していると、スタークさんが何か

を思いついたようで声をかける。
「向こうは必ず我々を追ってくる。それを利用しよう。作戦は簡単だ。まだ触りだけだが…奴を誘き寄せ、例のものを奪う。くれぐれも深追いするなよ!ガントレットが欲しいだけd…」
「ふぁぁ……」
「おい、あくびしてるのか!?人がせっかく説明してるのに…今の聞いてたか?」
作戦を提案して俺たちに伝えていたスタークさんだったが、ドラックスがまるで聞いていないかのように欠伸をしたため問い詰めるように言う。
しかし、まるで気にしてないかのようにドラックスさんはこう言った。
「作戦はってとこで聞くのやめた」
『「マジかよ」』
「はぁ…ツルツル頭は放っておこう」
「アイツらが得意なのはぶっつけ本番だ」
スタークさんは呆れたように言ったが、クイルさんは自分の仲間をそう擁護する。
「で、ぶっつけ本番で何する気?」
「ケツにモノ見せてやる」
「そうそう」

「『「……」』」

ピーターの問いに答えるマンティスとドラックスの発言に、こんなんで本当に大丈夫なのか？と不安になり、全員思わず無言になってしまったがスタークさんがこう続ける。

「…まあいい。集まってくれ。スターロード大先生、仲間をまとめるんだ」

「ただのスターロードでいい」

そんなやりとりをしながらもスタークさんは再び説明を続けていくが、クイルは

「アンタの作戦悪くはないが、つまんねぇ。俺に任せてくれ、もっとイケてる作戦を立ててやる！」

と自信満々に言い、ドラックスも続けていく。

「ダンス対決のことか？」

「ダンス対決？」

『なんだよそりゃ？』

突拍子もない発言に驚き、俺たちは思わず聞き返してしまった。

「映画のフットルースみたいに？」

「そう！フットルースだよ。今も名作ランキングに入ってる？」

「いや一度も」

ピーターとクイルはそういった映画トークを続けていたが、マンティスが何かに気づき困惑した様子で俺たちに聞いてくる。
「ねぇ見て！あのお友達、いつもアレやるの…？」
『んだありゃあ…？』
視線の先にはストレンジさんが足を組んで宙に浮かび、頭が凄まじい速度であちこちへと振り向いているではないか。
しばらくそれを続けていたが、ようやく落ち着いたようで地面にゆっくりと降りていく。
「おい大丈夫か？」
「なにしてたの？」
すぐにスタークさんが駆け寄り、ピーターがそう聞く。彼は相当疲弊したようで、呼吸を整えながら答えた。
「…はぁ…時を…超えてた……変化した未来を見てきた…来たるべき戦いがもたらす全ての可能性を…」
どうやらタイムストーンを使って色々な未来を見ていたようだ。
「それで、いくつ見たんだ…？」
クイルが全員の疑問を代弁するかのように聞く。

「はぁ……はぁ……１４００万７１０通りだ…」
「こっちが勝ったのは…？」
　スタークさんが静かにそう聞くと彼は一呼吸を置いてからこう言った。
「……〝２つ〟だ」

　一方、地球では…

「よく来てくれた。待ちわびたぞ」
　ワカンダへと到着し、クインジェットから降りたスティーブ達をティ・チャラと彼の親衛隊である〝ドーラ・ミラージュ〟が出迎える。彼女らの隊長であるオコエも一緒だったが、白い目を向けていた。
「何してるんだ、バナー？」
「え？いや、だって王様なんだから……」
「ああいや、そういうのは大丈夫だ…」

『な、エディ。しなくて良かっただろ?』
「ああ…そうだな」
ティ・チャラに向かって大袈裟なお辞儀をするバナー。それをティ・チャラはあっさりと拒否する。どうやらバナー達はサムに揶揄われていたようだったが、エディはヴェノムのおかげで恥をかかなくて済んだ。
「ありがとう、陛下。力を貸してくれて助かった」
「気にするな。地球の危機を前にしてただ待つわけにはいかない。それと……彼が目覚めたぞ、キャプテン」
ティ・チャラが横へと移動すると奥から現れたのはスティーブの親友であるバッキー・バーンズであった。二年前、ヒドラの洗脳から解き放たれる為に冷凍睡眠装置へと入っていたがようやく出てくることができたようだ。
「バッキー!」
「久し振りだな、スティーブ!随分と髭が濃いぞ?ちゃんと剃ってるのか」
「君も人の事は言えないだろ」
どうやら昔の自分を大分取り戻したらしく、スティーブとの会話の中では笑顔も見える。
左腕の義手はスタークとの戦いで完全に失われていたが、ワカンダで新しく開発して

貰った物を付けていた。
「えっと……彼がバッキー・バーンズなのか？」
「ああ、そうだぞ」
「話で聞いたイメージとちょっと違うけど？」
「まぁ、今まで約二年間、冷凍睡眠装置の中にいたからな」
『アイツは食っても不味そうだ』
「おい、ヴェノム！」
　エディがヴェノムを咎めながらもバナーとローディ、サムと話し合っている。バナーとエディはバッキーと直接会った事がないため、周りに詳しく聞いていた。
「みんな、そろそろ行くとしよう。シュリが待ちわびてるみたいだ」
　そう言うティ・チャラが耳に付けてる装置を外すと、そこから彼の妹のシュリの声が聞こえてくる。そうしてスティーブ達はシャリの元へと移動する事となった。

「凄い……これ、二兆以上のプロテクトが複雑に掛けられてるのね。物理的に取ろうとしても簡単には外せない代物だわ」
　ワカンダ・メディカル・センターにて彼女はヴィジョンを分析し、マインド・ストー

ンに関しても難なく解析してそう結論付けた。
「ヴィジョンだけがストーンの力を完全に制御できてる。だから誰にも盗られないようにとトニーと協力して厳重に掛けたんだ」
「今じゃそれが難問って事か」
「ねぇ……その、ヴィジョンからマインド・ストーンを切り離す事は出来るの？」
　ワンダがシュリに尋ねると、彼女は少し悩んだ末にこちらへ振り返って頷いてきた。
「……うん、出来るよ。でもこんな大量に掛かってるとなると、かなりの時間が必要になるかな」
「ならシュリ、お前は一刻も早く、彼からストーンを外してくれ」
「私だけじゃ時間が足りないから人手が欲しいんだけど…」
　するとエディが何か思いついたようで手を叩いた。
「なあ、ヴェノム。お前ならプロテクトも簡単に突破できるんじゃないか？ハッキングとか出来ただろ？」
『出来るとは思うが、報酬が必要だ』
「チョコレートでいいだろ？ちょっと高いの買ってやるから」
『ダメだ』
「何でだよ!?」

『もっと良いものを要求する』
「はぁ…分かった……じゃあ、これから来る奴を好きなだけ食べていい」
　エディが提案してくるとヴェノムは嬉しそうな声を上げる。
『本当だな？』
「約束する」
「えっと…よく分からないけど協力してくれるんだよね？」
『ああ、小娘。サッサっとやるぞ』
　ヴェノムは食べ放題が待っていると分かった途端、いつも以上のやる気を出した。
「……とにかくシュリ、そして君たちも彼を頼むぞ」
「うん、任せといてよ！絶対に成功させてみせるから！」
　シュリがそう言い、研究チームの各メンバーに指示を出していく。
　エディも軽く手をあげ、ヴェノムを作業に取り掛からせる。
　このままヴィジョンから何事もなくストーンを取り出す事が出来れば良かったが…
「……なぁ、あれ何だ？」
　窓越しに外を見ていたサムが誰かに聞くわけではなくそう呟いた。同じく隣にいるバッキーが空を凝視している。
「もう来やがったか」

雲に穴を空けながら勢いよく落下してくるのは黒い柱のような物体。ワカンダに直撃すると思われたそれらは、この国を覆うバリアと衝突して次々に爆発していく。
それを知って向きを変えたのか、途中からバリアの外に落下していった。
「あんなのと戦うっていうのか？」
『ああ、楽しみだな！サクッと済ませて俺たちもパーティに参加しよう』
緊張感のないエディとヴェノムの会話に他の面々は苦笑いを浮かべていたがすぐに気持ちを切り替える。
「……戦いの準備は出来てるな？」
「はっ！」
「なら全員に伝えろ。戦いへ出向くとな」
ティ・チャラから命令を受け、走り出すワカンダ人。スティーブもチームのメンバーに指示を出して彼と頷き合う。

戦闘

「みんなっ…！」

ワカンダ・メディカル・センターにてアベンジャーズ・ワカンダ連合軍とサノス軍の戦いを見守っているワンダは仲間達の危機を見て声を張り上げた。

ワカンダの最新技術を用いたバリアで、敵の侵攻を防いでいたスティーブ達だったが、敵が多く、数の暴力により無理矢理に突破されてしまう。

そこでスティーブとティ・チャラを筆頭に、向かってきたサノスの手下達と接近戦を展開していた……のだが、それでも多勢に無勢。徐々に劣勢に立たされていた。

「あのままじゃ……」

自分がいけば強力なサイコキネシスであの状況をどうにか出来るはず、とワンダは強く思った。だが敵がいつあの防衛線を抜けてくるか分からない以上、ここを離れるわけにはいかない。

『見ろよエディ、ゾンビみたいに不味そうな奴らがうじゃうじゃいるぞ』

「無駄口叩いてないで作業に集中しろ！」

気の抜けたやりとりをしている彼らの他に、シュリの部下の戦士が何人か残ってると

はいるとはいえ、彼らが侵入してきた敵に敵わなかったら、最愛のヴィジョンを失ってしまうという恐怖がワンダをこの場から動けなくさせていた。
「……ワンダ」
「ヴィジョン……？」
今もシュリとヴェノム達によるマインドストーンの摘出手術を受けているヴィジョンがワンダに声を掛ける。今までずっと黙り込んでいた為に、どうしたのかと心配そうにワンダは近付いていった。
「行ってください、みんなの元へ」
「っ！」
「貴女は今、ここにいるべきではない。仲間を助ける為に向かうべきだ」
「で、でもっ……」
もしもの事があったら、と言いたげなワンダにヴィジョンではなくシュリが口を開いた。
「もしもこっちで何かあったらすぐに連絡する。だから兄さんやみんなをお願い！」
「……」
『そこの小娘の言う通りだ！ラブロマンスは後にしてさっさと行け！……俺様の分は残しておけよ！』

「っ…！」
　さらにヴェノムがそう言った事で、ワンダはギュッと手を握り締める。ヴィジョンは大切な存在だが、仲間であるアベンジャーズの面々も同じく大切な存在である。ここでただ待ってるだけでは何も守れない、と意を決したワンダは部屋を飛び出していった。
「……あれで良かったの？実は不安なんじゃないの？」
「私はワンダや仲間達と触れ合い、人の心を手に入れ、ワンダを愛するようになりました。ですから彼女がいなくなって不安はあります」
「だったら…」
　エディが気遣うようにそう言いかけたが、ヴィジョンはそこで言葉を切り、「しかし」と言う。
「だからこそ信じなければならない。ワンダを、そして私の仲間達を」

「相手が多すぎる…！」
　アーマーに搭載されたあらゆる銃火器をフルに使い、敵を殲滅していたローディだったが、サノスの軍勢のあまりの多さに焦っていた。ハルクやスティーブ、ティ・チャラといった戦闘力の高いメンバー達がいるにも関わらず、戦況は芳しくなかった。歯を剥

き出しにしたゾンビのような生物がスティーブ達に群がり、彼らを地面に押し倒していく。

絶体絶命の状況だったが、突然、戦場に虹色のまばゆい光が降り注ぐ。そして、青白い閃光を纏った何かがサノスの手下達を瞬く間に消し飛ばしていった。

「今のは……!?」

「まさか……!」

光の中から現れたのは、新たな武器を手にした、雷の神、マイティ・ソーと、ガーディアンズ・オブ・ギャラクシーのメンバーである、遺伝子改造が施された高度な知能の持ち主であるアライグマのロケット。その相棒である、木のような生物のグルート。

その3人が、ムジョルニアを始めとしたアスガルドの武器を製作してきた伝説の惑星、ニダベリアからやってきたのだ。

それを見たスティーブやハルクは思わず笑みを浮かべる。

「サノスを呼んでこいっ!!」

雷神の咆哮が戦場に響き渡る。

俺たちは作戦通り瓦礫の裏に隠れ、サノスの到着を待っていた。作戦はこうだ。まず、ストレンジさんがサノスの気を取り、他のメンバーは襲撃隠れる。ストレンジさんの合図をきっかけに、各々が奇襲をかけ、隙をついてガントレットを奪い取る。その後、魔術でガントレットを奴の手の届かないところへ転送させ、ストーンのなくなったサノスを袋叩きにする。大まかに言うとこんな感じなのだが…

『どうしたワタル？』

「なんだか胸騒ぎがするんだ」

俺には嫌な予感がしている。なぜなら、先程からずっと心臓が高鳴っているからだ。まるでこれから起きることに対して警告するように。思わず、ナナセへのプレゼントがあるポケットをそっと撫でる。

『大丈夫だ、俺たちなら勝てる……ほら、そろそろ来るぞ』

ブラストにそう励まされ、やる気を入れ直していると、黒いモヤのようなものが地上に現れ、そこから紫色の肌を持った大男が現れた。左手には金色のガントレットをはめており、インフィニティストーンと思われるものが４つ装着されている。

「あれが、サノス……」

俺はゴクリと唾を飲み込んだ。

いよいよ戦いが始まる……深呼吸をし、精神を研ぎ澄ませる。

やがて、サノスとの会話を終えたストレンジさんが合図を送る。いよいよ作戦開始だ。俺は覚悟を決め、物陰から出て走り出した。

『楽勝だな、クイル』

ビルのような建物の残骸でサノスを上から押しつぶしたスタークさんは、おどけるようにそう言ったが、クイルは険しい表情でヘルメットを装着しながら、

「ああ…怒らせるとこまではな!」

と言い、ブーツについたブースターでサノスに向かっていった。

『俺たちも行くぞ!』

「ああ!」

俺とブラストもクイルの後を追いかけるが、サノスを潰した瓦礫が紫色に輝き始めていることに気づく。

「うおおぉぉぉ!!」

サノスの雄叫びと共に瓦礫が粉砕され、破片が赤く光ったと思うと、なんと破片が無数の鳥になり、スタークさんを襲い始めた。

『なんだこの鳥?!ぐぁっ!』

スタークさんは必死にそれを避けようとしたが鳥の数が多く、遠くに吹き飛ばされてしまった。だが、スタークさんならどうにかなるだろう。それよりも今は、目の前にい

るこの化物を倒さなくては。
「ブラスト！頼む！」
『任せとけ！』
俺の言葉にブラストが答えると、ブラストは俺の身体を覆っていく。全身が赤く染まり、体が強靭になる感覚を感じる。
その間にピーターやドラックス、ストレンジさんが糸や剣、魔術で攻撃したが、簡単にいなされてしまう。
「あああぁっ！」
「ぐぅっ！」
ドラックスが吹き飛ばされ、サノスがストレンジさんに殴りかかろうとした時、クイルが魔術でできた床を軽快なステップで歩みながらサノスの背後に近づき、爆弾をうなじに取り付ける。そして、中指を立てながら
「ドカーンッ！」
と煽り、爆発すると同時に、ストレンジさんの作ったゲートウェイで距離を取る。
『もう一発喰らえ！』
爆発で怯んだ隙に俺たちが拳を叩きつけるが、やはり効いている様子はない。すると、赤いマントがサノスのガントレットに絡みつき、左手を封じた。

「これでストーンの力は使えなくなったぞ！」
『やるじゃあねぇか！魔術師！畳み掛けるぜ！』
ストレンジさんのおかけで隙ができたので俺たちはここぞとばかりにラッシュをかける。
『オラァ!!』
爆破を交えた攻撃をしているのだが、一向にダメージを与えられない。
その時、ゲートウェイがサノスの背後に現れ、中からピーターが飛び出す。
「魔法だっ！もういっちょ！魔法でキック！」
ゲートウェイを行き来し、サノスに攻撃をしては、離れるというヒットアンドアウェイを繰り返している。
『坊主！なかなかいい動きをするじゃないか』
ブラストが感心していると、サノスがピーターの攻撃に合わせる形でつかみかかる。
「ぬぅ！この虫ケラがぁ!!」
「うわあっ！」
ピーターは掴まれたまま振り回され、地面に叩きつけられてしまう。そのままストレンジさんの方に彼を投げ、２人とも吹き飛んでいく。
『大丈夫か！』

（おい、ブラスト前だ！）
ブラストが気を取られていると、前から瓦礫が飛んでくる。
『うおっ！』
瓦礫を爆破して防御することには成功したが、大きく振りかぶったサノスの剛腕を止めることはできなかった。もう一度食らったら中にいる俺までダメージを受けてしまうだろう。それほどの威力だった。
「そこのシンビオート！お前も邪魔だ、引っ込んでいろ！この宇宙のガンが!!」
俺たちは吹き飛ばされながら、なんとか態勢を立て直す。
『チッ…このままじゃジリ貧だな』
（くそっ…どうする!?）
必死に頭をフル回転させているが、何も思いつかない。その間にもサノスはストレンジさんのマントを左手から無理矢理剥がし、再びストーンを使えるようにしてしまう。そこで、戻ってきたスタークさんがサノスにミサイルの雨を降らせる。
しかし、奴はそれを全てガントレットで受け止める。そして、今度はその爆炎をスタークさんに向けて放ち始めた。
（まずい！ブラスト!!）
『ああ、分かってる！』

俺たちはスタークさんの前に飛び上がり炎を受け止めた。熱自体は彼に届く前に吸収することはできたが、衝撃を殺すことはできずにまとめて吹き飛ばされる。ピーターがガントレットに糸を巻き付けて封じてくれたおかげでサノスの攻撃は中断された。

その間に体勢を立て直し、飛行機のような瓦礫を持って突撃していくスタークさんに続いて俺たちも攻撃を仕掛ける。すると、残骸の影から青い肌を持ち、ところどころに機械のような装飾がなされている女性が現れ、サノスに奇襲をかける。

「殺すべきだったね!!」

「そんなの部品の無駄だ!」

「ガモーラはどこ!?」

会話の意味は分からなかったが、ガモーラ、と言っていたことからおそらく彼女もクイル達のようにサノスに恨みを持っているのだろう。彼女の攻撃はガントレットに受け止められ、投げ飛ばされる。しかし、その隙にストレンジさんが魔術で縄のようなものを生成し、左手を閉じれないように縛り付ける。

「うおりゃぁ!!」

「なにい!?」

ドラックスもサノスの右足に飛びつき、その動きを封じ込めた。クイルもなんらかの装置で右手を封じ込め、ピーターが上半身に糸をくくりつけ拘束した。俺たちも畳み掛

けるようにサノスを羽交い締めにし、より一層動きを封じていく。
「よせっ！はなせっ!!」
『離せと言われて話す馬鹿がいるかよ！今のうちだ!!』
『よくやった！後はこいつをいただくだけだ！』
　スタークさんが必死にガントレットを引き抜こうとしていると、サノスの上にゲートウェイが現れ、マンティスが奴の頭にしがみつく。続けて超能力のようなものでサノスの意識を奪っていく。サノスは思わず呻き声をあげ、彼女を振り払おうと身体に力を入れる。
「早くして！この人とても強いっ！」
『こいつどんだけ馬鹿力なんだよ！』
　マンティスとブラストが切羽詰まったように声を上げる。それを受けたスタークさんがピーターを呼び、ガントレットをよりはやく奪えるように2人で引き抜こうと試みる。俺たちも全力を尽くしてサノスを抑えていると、クイルがサノスに話しかける。
「ガモーラはどこだ！ガモーラをどこにやった!!」
　クイルがそのまま怒鳴りつけるように問いかけていると、青い肌の女性が口を開く。
「そいつは、ガモーラと一緒にヴォーミアに行った。だけどそいつだけが戻り、ガモーラは戻ってこなかった。つまり……」

不味い…なにやら不穏な空気が漂っている。俺がそう感じ取った瞬間、スタークさんも気づいたようでマスクを解除し、クイルに告げる。
「おいクイル、冷静になるんだ。いいな？おい、やめろ。もう少しで外れるんだ!!」
「スタークさんの言う通りだ。落ち着け。な？」
俺もブラストの中から口だけを出してそういったが、彼は止まらない。
「クソ野郎!!ガモーラを殺してないよな!?」
「おい、ブラスト！こいつの口を塞げ！」
これ以上彼を刺激させないようにサノスを黙らせようとしたが、それよりも早く口を開いてしまう。
「…ころ…したぁ……」
「っ!!…嘘だよな…？嘘だと言え…嘘だと言えっ!!!」
サノスの言葉に我を失ってしまったクイルは怒りのままにサノスの顔面を殴りつける。
「きゃあっ！」
頭が揺れた衝撃でマンティスはサノスから一瞬手を離してしまう。
『くそっ！落ち着きやがれ！』
「クイルっ！よせ！やめるんだ！」

ブラストとスタークさんが慌ててクイルを止めようとするが、もはや手遅れだった。
「ぬあぁぁっ!!」
一瞬の隙で意識を取り戻したサノスはピーターを振り払い、外れかけていたガントレットを装着し直す。頭の上のマンティスも投げ飛ばし、全身を振り回すことで俺たちとドラックス、ストレンジさんも吹き飛ばした。
『おいおいおいおい!やべぇんじゃねぇか!?』
(くそ!もう少しで外せたのに!!)
やっとの思いで拘束していたサノスが解放されてしまったことに俺は落胆を隠せなかった。もうサノスは完全に意識を取り戻し、反撃をしようとしたクイル達をストーンの力で気絶させていた。それを見たスタークさんがナノマシンで作成した刃で直ぐに切りかかるも簡単に受け止められ、はじかれる。俺たちも援護に向かおうとしたが、目の前の光景に固まってしまった。
『なんだよこれ…』
(…嘘だろ…?)
莫大な数の隕石が空を覆っていた。